表裏頭脳ケンイチ

第５話「重なった境遇と信じる心」

隆「♪～果てなく続くGalaxy　その先で待ってる君よ

必ず迎えに行くと誓う　信じてくれ　俺は愛を追いかけるShooting Ster～♪」

ここは閏台高校から徒歩１５分ほどの場所にある、閏台中学や閏台高校の生徒たちに定評の遊び場、カラオケ「こまいぬ」。ここの一室に、メディア部の８人は集まっていた。その中で隆平はマイクを握って熱唱している最中で、賢一や佐武兄弟、修丸は楽しそうに隆平の歌に聞き入っている。

晶「しっかしまあ～隆平の奴、歌うまいなぁ。」

陽「ホント、隆平くんの歌って初めて聴きましたけど、音程とか全然外してないみたいですし。」

歌い終わった後なのか、咥えていた飲み物のストローから口を外しながら素直に感心する晶やその隣に座っている陽に、さっきまで隆平の歌を聞いていた修丸がもっともそうに説明する。

修「そりゃそうですよ。隆平くん、人よりもずっと耳がいいですからね。」

修丸の話に、晶は少し呆れるように言う。

晶「そんなこたぁ知ってらあ。でも、地獄耳だからって歌がうまいとは限らんだろ？」

修「まあ、そうなんですけど。でも前にクラスの友達とカラオケに行った時に言ってたんですよ。地獄耳と絶対音感は紙一重だって。」

陽「そっか、確かに耳がいいと音程も合わせやすいもんね。」

修「単純に歌が好き、ってのもあるんでしょうけどね。ああ見えて歌番組とか大好きみたいですし。」

歌っている隆平を見て少し苦笑気味な修丸に、晶が少し面倒くさそうに言う。

晶「ったく、だからって部活動の時間に勝手に予約入れるか？しかもご丁寧に８人分も！」

修「はは、本人いわく、「学祭の練習は大事だから」、だそうですけど。隆平くん、学祭のクラス対抗カラオケ大会で１位とるぞ！ってすごくやる気ですからねぇ……」

孝「ただ遊びたいだけだろうが……勝手に付き合わされて費用も自腹なんて、こっちはとんだ迷惑だ……」

カラオケにまで持ち込んだ本から目を離さずにそう言う孝彦に、修丸や晶、陽が気付く。

陽「孝彦くん、そういうのに興味なさそうだもんね（汗）」

孝「あるわけないだろ？あんな騒がしいイベントの何が楽しいんだか……」

孝彦は本の文字を目で追いながら、口調だけ呆れてきている。と、ちょうどその時隆平の番が終わる。

海「隆平センパイ、すっごい上手ですね！びっくりしました！」

隆「へへ、まあな！ま、この俺が出場するんだ、今年のカラオケ大会で学年１位を取るのは、俺たち５組で決まりだな！」

そんな言葉を聞いて、賢一は心底ほっとしたため息をついて言う。

賢「センパイと同じ学年じゃなくてよかった……」

路「ったく、隆平のせいで俺らのクラスは半ばあきらめムードなんだぜ？」

苦笑しながらそう言う龍路に、修丸もどこか嬉しそうに言う。

修「いやあ、ホント隆平くんと同じクラスでよかったです。」

隆「そうだろ、そうだろ！ お前もやぁっと俺のありがたみがわかったみたいだな！」

嬉しそうにそう言う隆平だったが、ふとハッとして晶の方を気まずそうに見る。

隆「あ、センパイ…その、やっぱ勝手に部活動の時間にカラオケ予約いれたの、怒ってますよねぇ……？」

その言葉に、晶は軽く驚く。

晶「へ？…お前、まさか自分らの話聞いてたのか？」

賢「話って、そんなこと話してたんですか？全然わかんなかったですけど。」

晶「あ、ああ。部活の時間にカラオケの予約なんか入れやがって、みたいな話を陽や修丸とな。…まあ曲もうるさかったし、歌の邪魔しちゃ悪いからそんな大声も出さなかったからなぁ。」

そこまで言って、晶は隆平の方を見る。

晶「で、お前はスピーカーの近くで歌いながら、あの話が聞こえてたってことか？」

隆「ええ、あれくらいなら普通に聞こえますよ。」

そう言ってから、隆平はハッとして申し訳なさそうに言う。

隆「あ、いや…こーいうことは俺の普通は普通じゃないもんな（汗）」

そんな隆平を、本を読みながらちらりと見て、孝彦がふと複雑そうな顔をした事には、誰も気付いていない。

晶「お前の地獄耳は折り紙つきだもんな。…しっかし、羨ましいよ。人より特化した何かがあるなんてさ。」

純粋にそう言った晶だったが、隆平は珍しく切なそうな顔を見せた。

隆「そうでもないっスよ……」

その表情に晶だけでなく、話を聞いていた賢一と陽も少し心配になったようである。

陽「隆平くん……？」

晶「なんか、変な事言っちまったな…」

隆「ちょ、何しんみりしてるんスかぁ！せっかくカラオケ来たんだから、楽しみましょうよ！」

晶「そうか……？」

そんな会話の中、ふと賢一は孝彦の方に目をやった。そこには、本から目線をずらさずに、まるで隆平の言葉の意味を悟ったかのような少し辛そうな顔をしていた孝彦がいた。

賢「孝彦センパイ……？」

その表情の意味こそ解らずとも、賢一は孝彦がただ本を読んでいるだけでないことには気付いていた。

時刻は１７時２０分頃。１５時から２時間の予約で入っていたカラオケを終えた帰り道、「こまいぬ」から学校に向かってメディア部の８人は歩いていた。

隆「いやぁ～！楽しかったなぁ！」

呑気にそう言う隆平の隣で、晶が不満そうな顔をしている。

晶「お前なぁ…先生に活動内容を報告する自分の身にもなって見ろよ…」

海「部長さんは大変ですねぇ。」

隆「まあ、まあ、まあ！学祭の練習してましたぁ！でいいじゃないっすか！」

修「そ、そーいう問題なんですか（汗）？」

戸惑い気味にそう言った修丸だったが、隆平はそんな修丸の首に腕を回す。

隆「しけたこと言うなよ、修丸くぅ～ん！」

修「ちょ、ちょっと…気持ち悪いなぁ…」

隆「んだとぉ？お前、俺にケンカ売るってのか？」

修「ええ？！ぼ、僕ケンカなんて…！」

路「よせよせ、修丸がケンカなんかしたら一瞬で負けちまう！」

海「あはは、確かにぃ！」

楽しそう（？）にそんな事を言って歩いている５人の後ろで、孝彦、陽、賢一がそれを見守るように歩いている。

賢「センパイ方、楽しそうだね。」

陽「そうね。…でもよかったわ。なんか変なこと言っちゃったかなって思ったけど、隆平くん元気になって。」

そう言った陽に、孝彦はどことなく嬉しそうに言う。

孝「アイツが元気ないなんて、この世の終わりもいいところだからな。」

賢「この世の終わりかあ…センパイうまいこと言いますね！」

孝「だろ？」

そう言って、孝彦はふっと心配そうに前を歩く５人を見る。

孝「ま、アイツにゃアイツにしかわからない苦労も多いんだけどな…」

賢「え？」

訊き返してくる賢一に、孝彦はハッとして少し慌てる。

孝「あ、いや…なんでもねーよ。…ほら、ぼさっとしてたら置いてかれるぞ！」

そう言って早足になる孝彦を見て、賢一と陽は不思議そうに顔を見合わせた。と、そんな２人が前を見た時、前を歩いていた隆平が頭に片手を当てて、もう片方の手を近くにあった自販機にかける。

隆「っつ…」

修「隆平くん？…どうしました？」

隆「あ、いや…ちょっと頭痛してさ―」

そう言って、隆平はふっと何かに気付いて周りを見渡す。

路「今度は何だ？」

隆「今、なんかガラス割れるような音しなかったか？」

海「ガラス、ですか？」

路「別に…なあ？」

そう言われて、修丸も少し不思議そうにうなずいている。

隆「マジか……センパイは？」

晶「いや？ま、自分らはお前と違ってそこまで耳がいいわけじゃないから何とも言えないな。」

少し考え込んで言う晶。

隆「じゃあ、気のせいかな？ま、どっかで皿とかコップを割っただけかもしれないしな！」

そう言って笑う隆平を見て、陽がふと賢一に訊く。

陽「ヨシくんは聞えた？」

賢「ううん、何も？……！」

陽に訊かれて答えながら、賢一は気になったのか隆平同様目線を上にあげていたが、フッと何かに気付いた。

陽「ヨシくん……？」

陽が声をかけたその時には、すでに賢一は来た道を戻って走り出していた。

陽「ちょっと、どうしたの！？」

その声に、他の６人も気が付いて後ろを見る。その時にはもう、賢一は道路脇の塀を登り、懸垂の要領で、ある家のベランダに入ろうとしていた。

晶「アイツ、何やって―」

晶が慌ててそう言おうとした時、賢一が必死の形相で部員たちを見た。

賢「誰か救急車呼んでください！中で人が首吊ってるんです！！」

晶「な…！」

驚く晶の後ろで隆平は素早く携帯を取り出していて、孝彦は咄嗟に腕時計を見る。そして賢一の方はベランダに上がり終え、ポケットからハンカチを取り出して、それを見て少しためらった後に意を決してそれを手に当て、鍵の近くのガラスを割ろうとしている。

隆「あ、救急ですか？！人が家ん中で首吊ってるんです！えっと…」

そう言いながら隆平は電信柱を見つけて、それを注視している。

隆「黒老４丁目の、１３番です…はい。…はい。」

そして隆平は賢一の方を見るが、賢一はすでに鍵を開けて中に入っていた。

隆「今、連れがガラス割って中入りました。…はい、わかりました！」

そう言って隆平は電話を切ると、賢一のいる方を見る。

隆「賢一ー！降ろせたかー？！」

賢「いや……あ、取れました！今、縄取れました！」

隆「ソイツ、意識あるか？！」

賢「……ダメです！！息もしてません！！」

隆「そしたらな、平らなとこに寝かせて心肺蘇生ってできるか？！」

賢「えっと、何すればいいんですか？！」

隆「んっと…」

孝「まずは胸骨圧迫だ！胸の真ん中あたりを、１分間に１００回くらいのペースで、手の平を重ねて押してやるんだ！」

そう言って悩みこむ様子の隆平を見て代わりに説明する孝彦。

賢「は、はい！！」

孝「やりながらでいいから聞けよ？！３０回圧迫したら次は人工呼吸だ！指で軽く顎を持ち上げて、その状態でたっぷり息を入れてやれ！２回やったらまた胸骨圧迫！そしたら人工呼吸の繰り返しだ！」

賢「わかりました！！」

それから、孝彦は部員たちを見渡す。

孝「誰かあそこから入れる奴いないか？」

路「たぶん、行けると思うけど……」

少し自信なさげにそう言う龍路。

孝「そしたら、中入って玄関の鍵開けてきてくれないか？いくら賢一でも１人で何回も心肺蘇生してたら疲れちまうだろうし、経路確保しとけば救急車来た時にすぐに運べるだろうからな！あと、余裕出来たらでいいから現場の写真も撮っといてくれ！」

路「あ、ああ！わかった！」

そう言って龍路は賢一と同じ要領でベランダに掴まり、賢一ほどは早くなくとも、ベランダに上がった。

修「あの、孝彦くん…勝手に鍵とか開けてもいいんですか？」

孝「人の命がかかってんだ！そんなこと言ってる場合じゃねえよ！」

修「あ、そうですよね…！」

必死にそう言う孝彦に、修丸はいつものようにビビっている。

孝「とにかく！修丸と龍海、お前らは賢一と龍路手伝いに行くぞ！」

海「え？」

修「は、はい！」

孝「陽と晶センパイはここで救急車来たら説明お願いします！」

晶「わかった！」

力強く答える晶の隣で、陽もうなずいている。

孝「…隆平、お前は一応警察にも電話入れといてくれ！」

隆「おう！任せとけ！」

そう言うや否や、隆平はすぐにまた携帯を開く。また、孝彦もそれを確認することもなく塀と塀の間をぬって、玄関があるであろう自分たちのいる道路と反対側の方へ走り出し、修丸や龍海も慌てて孝彦について行った。

隆「あ、警察ですか？人が家ん中で首吊ってて…あ、救急車は呼びました。はい、黒老４丁目の１３番です。今連れが中入って、心肺なんとか…あ、そうです、心肺蘇生してます。はい。あ、俺外にいますんで。はい。はい……」

電話をする隆平の側で、晶が感心したように言う。

晶「それにしても、こんな時なのに要件しっかり伝えてるな、隆平の奴……」

陽「すごいですよね。それに孝彦くんも指示とかテキパキしてて……」

晶「ああ。なんていうか、お互いに補い合ってるというか……」

その時、晶も陽も、電話をしている隆平もふっと何かに気付いて同じ方を見た。３人の目には、サイレンを鳴らしてやってきた救急車が遠目に見えた。時刻は、１７時４０分を過ぎたころだった。

主に隆平と孝彦の行動の的確さのおかげもあって、首を吊っていた高校生くらいの男子は病院に搬送された。そして、その男子の安否も気になるなか、賢一、孝彦、隆平、龍路の４人は首吊りのあった家と１番近い交番で警察に事情を話していて、晶、陽、修丸、龍海の４人はその傍に立って４人の話が終わるのを待っていた。

警官「なるほど、状況はよくわかったよ、ありがとう。…しかし、緊急だったのに随分と的確に動けたものだね。現場の写真も非常に参考になるし、それに応急処置もだ。救急隊員の人、君たちの処置は完ぺきだったって褒めてたよ。」

少し感心するようにそう言った警官に、賢一が答える。

賢「いえ、僕、心肺蘇生とかなんにもわかんなかったんですけど、センパイがわかりやすく指示してくれたから……」

路「写真だって、撮っといたほうがいいって言ったのは孝彦だしな。」

そう言って孝彦を見る賢一と龍路に、孝彦は少し余裕のある顔をする。

孝「でも、実際に心肺蘇生をしたり、カメラを使えたのはお前や龍路だろ？」

警官「それにしても、家の中で人が首を吊っているなんて、本当によく気付けたね？」

また感心するような口調でそう言う警官に、賢一が謙遜しながら答える。

賢「いや、あれは隆平センパイがガラスの割れる音に気付いたから気付けただけで……」

そう言って、賢一は不安そうな顔をしている隆平を見る。

賢「センパイの言ってた通り、部屋中に割れたガラスが散らばってたんです。…センパイの耳の良さ、本当にすごいですよ。」

隆「ん？そうか…？」

いつもの元気がない隆平に、孝彦が不思議がる。

孝「どうした？…なんか元気ないな…」

隆「あ、いや……まさか死んでないよな、って思ってさ……」

警官「首を吊ってた、彼の事かい？」

心配そうにそう訊く警官に、隆平はうなずいた。

警官「そればっかりはなぁ……まあ、ご家族が了承してくれたらだが、あの子がどうなったか君たちに連絡することもできるけど、どうする？」

隆「あの、できるならお願いします……」

警官「わかったよ。……まあ、不謹慎だが、万が一あの子が亡くなられても君には責任はないから、そこまで落ち込まなくても……」

隆「でも、もしアイツ死んだりしたら、責任ないなんて言えねーよ！……あの音、やっぱりただの音じゃなかったのに、軽く考えてすぐあの家探さなかったから……」

路「お、おい……」

隆「もし賢一がいなかったら、俺は異変に気付いていながらアイツの事、見殺しにしたことになるんだぜ？……なのに責任ないなんて……」

賢「センパイ……」

気を落とす隆平に声をかけて心配する龍路や賢一、話の邪魔をしないようにと声こそかけないが同じく心配しながら見守る晶、陽、修丸、龍海だったが、唯一孝彦は無表情に隆平を見ようとはしていなかった。

事情聴取も一通り終わり、時間が遅くなったという事で鳩谷への活動報告は晶１人がしてくれるという事になり、他の部員たちは家路についていた。その中で、同じ方向へ帰る隆平と孝彦は、長い時間無言だった。隆平は相変わらず心配そうにうつむき、孝彦は無表情に前を向いている。

孝「おい、そんな顔で帰ったら家族が心配するぞ？」

起伏の少ない口調でそう言った孝彦に、隆平はうつむいたまま言う。

隆「……やっぱり、俺ってノー天気でバカだよな……」

孝「……」

あえて何も答えない孝彦に、隆平は顔を上げて続ける。

隆「俺があの音のことを気にしてれば、もっと早く首吊りに気付けたかもしれないのに……やっぱ、アイツ死んだら全部俺の責任―」

孝「んっとにバカだな、お前……」

隆平の言葉を遮って、静かにそう言い放った孝彦に、隆平は何も言わずにうつむく。

隆「だから、さっきから言ってんだろーが……俺はノー天気で―」

孝「そーじゃねーよ。」

そう言って隆平を見た孝彦は、どこか切なげな顔をしている。

隆「どういうことだよ？」

孝「確かにお前の言う通り、賢一がいなかったら確実に手遅れだったのは明らかだがな、でも、お前がいなかったら、その賢一ですら異変には気付けなかっただろうが。」

隆平はその言葉の意味を理解せずに、不安そうに孝彦を見ている。

孝「それとな、これはおやじから聞いた話だけどな、事故とかで病院に搬送された人が亡くなっちまうのは、そりゃ、応急処置の不適切さとか、負傷の程度とかも大きな要因だが、救急車を呼ぶときの電話対応でもたついた時間のロスってのも結構大きな要因の１つなんだと。…その点、お前はしっかりと、しかも速やかに要件や場所を伝え、向こうの指示もすばやく現場に入ってた賢一に伝えてた。」

隆「でもよぉ、結局その応急処置？だかを賢一に指示したのはお前じゃねえか……」

不安げにそう言う隆平に、孝彦はあえて呆れたように言う。

孝「ったく、それだけじゃねーよ。…賢一だって言ってたろ？お前がガラスの音に気付いたから、あの家で誰か首吊ってるって気付けたって。……まだ安否はわかんねーから「今の所」って話になるけど、お前の地獄耳のおかげで、俺たちみんなアイツを見殺しにしなくて済んだんだぜ？」

隆平は不安そうに孝彦を見るだけで、何も言わない。

孝「お前は人より耳が良いからさ、いつも人のプライバシー傷つけないように気をつけて神経すり減らしてんだろ？今回だって、ガラスの音なんか聴いちまったからここまで塞ぎ込みやがって……」

そこまで言って、孝彦は少し怒りを口調に含める。

孝「もしアイツの家族がお前を責めるってんなら……俺はお前に地獄耳を与えた神様とかいう奴を責めてやる。」

隆「孝彦……」

嬉しそうにそう言った後、隆平は一気に冷や汗を流す。

隆「お前がそんな優しいこと言うなんて、明日は雪だな…まだ１０月だってのに……」

その隣で孝彦が拳を握っていたのは、言うまでもない……

その日の夜、宗光家では日課の皿洗い（陽一郎が皿を洗い、陽と賢一で拭く）をしながら、陽と賢一は今日の出来事を陽一郎に話していた。

父「そうか……その子、助かればいいな。」

賢「うん……」

陽「でも、ヨシくんすごかったわね。あの子が首吊ったことに外から気付いて、しかもあんなに早く外からベランダに上がっちゃうなんて。」

賢「それは、警察の人にも言ったけど、隆平センパイがガラスが割れる音がしたって言ったから、気になって上を見たら偶然見えただけで……」

父「でも、それに気付いたのがお前じゃなかったら、誰もベランダに上がれずに家族か警察を待たなきゃいけなかったかもしれないだろ？」

陽「そうよね。龍路くんもベランダから入れたけど、結構大変そうだったし……」

父「やっぱり、素早く家の中に入って救助にあたれたのは、お前が普段から怠けずに体を鍛えてるからじゃないのか？」

賢「だったらいいんだけど……」

そう言った賢一はどこか不安げであり、陽一郎も陽もその様子に気付く。

父「なんだ賢一、元気ないなぁ。そりゃ、その子の安否が気になる気持ちもわかるが……」

陽「……何か気になることでもあるの？」

賢「いや……なんか、今年になってからメディア部の周りで人が死んだりすることが多いなぁって。今回だって、まだあの子が助かったかどうかわかってないしさ……」

陽「ヨシくん……」

心配そうにつぶやく陽に、賢一は不安げな、焦ったような表情で言う。

賢「去年はそんなことなかったんでしょ？なのに……僕のクラスメートだった篠原さん、孝彦センパイや龍路センパイと同じクラスの日下さん、それに口裂け男の時だってメディア部は動いてたし、夏休み明けには龍海が殺人の一部をビデオに撮ってたし……」

父「おい、考えすぎだよ。…少し不謹慎かもしれないが、事件自体は毎日いろんなところで起きてるんだ。それがたまたま偶然、お前たちの近くで起こっただけさ。」

賢「うん……」

そう答えた賢一の声は、誰が聞いても沈んでいるのは明らかだった。そんな賢一を、陽はとても心配そうに見つめていた。

自分の部屋でベッドに横になり、賢一は考えていた。

賢「（確かに、偶然と言えばそれで片付けられるだろうけど……）」

そして賢一はカーテンを開けたままの窓を見た。夜空には下弦の月が浮かんでいる。

賢「（今年と去年で、メディア部で変わったこと……もしかして事件がよく起きるのは、僕がメディア部に入ったからなんじゃ……）」

そう思ってから、賢一は今年度になってから起きた事件を思い出し始める。

　―修「あれは絶対に殺す気満々でしたよ！…口裂け男がこっちを向いた瞬間に、犬が唸り声を挙げながら走って来て…」

孝「訳わかんねーよ……真紗子はなんで死んだんだよ…どうして急に死体が現れるんだよ！あの本の山は一体なんなんだよ！！」

海「じゃあ、やっぱりそれと今回の事件って関係あるんですか？！」

隆「……あの音、やっぱりただの音じゃなかったのに、軽く考えてすぐあの家探さなかったから……」―

賢「（修丸センパイ、孝彦センパイ、龍海、それに今回は隆平センパイが異変に気付いて……）」

そこまで思って、賢一は不安な顔つきのまま起き上がった。

賢「（これからも……部活の誰かが事件に巻き込まれたりしたら……）」

そして、ふっと賢一は陽の事を想った。

賢「（ひな……）」

と、その時だった。

　―？「お前のせいだ……お前が殺したんだ！！」―

賢「！」

まるでフラッシュバックのように、怒りに満ちた声が賢一の脳裏をよぎって行った。その謎の言葉に、賢一は頭を抱えてその場にうずくまった。

賢「（な…なんだ、今の声……）」

―？「お前がいるせいで、みんな不幸になるんだ！！」―

賢「！！」

再び聞こえた声に、賢一はなお苦しそうに頭を抱え、その手は先ほどよりも力んでいる。

賢「うわぁぁぁ！！」

１階にいた陽一郎や陽にも賢一のその声が聞こえ、２人は慌てて階段を上って賢一の部屋に来た。

父「おい、賢一！！」

陽「どうしたの？！大丈夫！？」

２人がドアを開けると、そこには頭を抱えたままベッドの側面に倒れている賢一がいた。

陽「ヨシくん！！」

陽は賢一を見つけるや否や、急いで駆け寄ろうとしたが、その時だった。

ケ「近寄るんじゃねえ！！」

いきなりの声に陽はもちろん、陽一郎も驚いて立ちすくむ。そんな２人をしり目に、賢一は静かに片膝をついて立ち上がり、頭を抱えたまま陽と陽一郎を睨んだ。

父「お、お前……」

陽「ケンイチくん！」

陽たちに叫んだのはケンイチだった。ケンイチは頭を押さえた手で隠されていない片目で２人を睨んでいたが、急に激しい動悸に襲われた。

ケ「！」

ケンイチは自分を襲った激しい動機にビクつき、それから両手で頭を抱えた。

ケ「違う……違う！オレは……賢一は……！！くそぉ！！」

問答し、苦しむ様子の賢一を見て、陽は咄嗟にケンイチに駆け寄った。

陽「ケンイチくん―」

ケ「来るなぁ！」

そう言って、ケンイチは机の上に合ったカップを投げつけて陽を拒んだ。カップは陽には当たらなかったものの、後ろの壁にぶつかって割れてしまった。

父「お、おい！！」

驚く陽一郎には目もくれず、ケンイチは頭を抱えている。それでも陽は臆することなく再びケンイチのもとへと駆け出した。

ケ「…！」

ケンイチは自分を抱きかかえたそのぬくもりに気付き、いくらか落ち着きだした。

陽「落ち着いて……お願い……！」

ケンイチを抱きかかえて必死にそう言う陽に、ケンイチは冷静になりつつも陽を突き放した。

ケ「…っ離せ！」

陽「……」

陽は突き放されても何も言わず、ただ心配そうにケンイチを見ているだけだった。ケンイチは意識的に陽から目をそむけ、陽一郎も陽同様、心配そうに２人を見ている。

父「ケンイチ……さっき叫んだのはお前なのか？それとも賢一だったのか……？」

そう言う陽一郎を軽く睨み、ケンイチは言う。

ケ「そんなこと、テメーには関係ねーよ。」

父「関係ないことあるか！俺はお前の…賢一の父親だぞ！」

その一言に、ケンイチは眉をひそめた。

陽「お父さん……」

ケ「父親だから、なんだって言うんだ……」

呟くようにそう吐き捨てたケンイチに、陽は気付いた。

ケ「賢一を１番疎んだのはテメーじゃねーのかよ！」

その言葉に、陽一郎も陽も驚いたが、２人が何かを言いかける前にケンイチはハッと目を見開いてからまた頭を抱える。

ケ「くそっ…！違う！宗光じゃねぇよ…！宗光陽一郎じゃねぇ！……」

陽「え…どういうこと？」

陽の言葉に、ケンイチは再び我に返った。

父「もしかして、賢一が記憶を失くしたきっかけは本当の父親にあるのか……？」

その言葉に、陽はハッとして陽一郎の方を見た。

陽「お父さん…！」

父「ん？…あ！」

ケンイチが最も嫌がる話題を出してしまったことに気付いた陽一郎だったが、恐る恐るケンイチの方を見て見たが、ケンイチは怒る様子はなかった。

ケ「……いい機会だ。…時間はないが、話せることは話してやるよ。……それで気が済むんならな。」

落ち着いてはいるものの、いまだ頭を抱えたままそう言ったケンイチに、陽も陽一郎もお互いに顔を見合わせ、決意を見せてうなずきあってケンイチのもとへ歩み寄った。それを見たケンイチは、力なくベッドに座り込み、うつむいたまま話し始める。

ケ「お前たちが聞いたのは、オレじゃない。賢一の声だよ。」

陽「ヨシくんの……？そう言えば、あなたと初めて会った時も、ヨシくん、あんなふうに……」

ケ「……あの時の、そして今の状態で放っておけば、賢一の精神は確実に死んでしまう。」

陽「精神って…心ってこと？」

ケ「……幼稚な言い方をすれば、そうなるな。精神が死んだ人間は、植物か、もしくは人形だ。放っておけば食物も摂取せず、いずれは体も死んでしまう。…だからオレは、この状況では表に出ざるを得ないんだ。」

そう語るケンイチに、陽一郎がふっと訊く。

父「それにしても、いい機会とか、時間がないって言うのは？」

ケ「賢一だよ。」

父「賢一…？」

不思議がる陽一郎に、ケンイチは自分の胸に手を当てて言う。

ケ「アイツは今、人の話なんか聞けないくらいに混乱してやがる。だから逆に、アイツに聞かせたくない話も、今ならできるんだ。」

そう言うケンイチに、陽は気付いたように言う。

陽「もしかして、ヨシくんの記憶の話をするなって言うのは……」

ケンイチはそう言った陽を疎ましげに見てから、静かにうつむく。

ケ「いいか？お前たちは大きな勘違いをしているんだ。」

陽「え？」

ケ「賢一は記憶喪失ではない……アイツの記憶は、今だって賢一の中に存在している。」

父「それじゃあ、なんで賢一は昔のことを思い出せないんだ……？」

ケ「……失ってなんかいないんだ。閉ざしている訳でもない。だから、賢一はきっかけさえありゃ、いつだって記憶を取り戻せる状態にある。無意識のうちに見て見ぬふりをしているだけなんだ……だが、少しでもその記憶に触れてしまった時、賢一の精神は確実に死ぬ。」

陽「そんな……」

ケ「前にも言ったが、オレは神童賢一の体を有することで生きることができる。…オレは賢一に、賢一の弱さに殺されるわけにはいかないんだよ。」

そう言ったケンイチに、陽は少しためらったように言う。

陽「もしかして……」

その言葉に、ケンイチは陽の方を向いた。

陽「あなたは、ヨシくんに記憶を取り戻させないために―」

ケ「そこまでだ。」

ケンイチは陽の話を遮って静かにそう言い放った。

ケ「いいか？賢一はオレが表に出たことを知らない。……何を話すか、この状況をどう説明するか……」

陽「え……？」

そう言って、ケンイチは静かに目をつぶったかと思うと、そのままベッドに倒れ込んだ。

陽「あ！ケンイチくん！」

陽は思わずケンイチを受けとめたが、その顔を見てまた少し驚いた。目をつぶっただけと言うよりも、今さっきまでずっと気を失っていたような顔をしていたケンイチに、陽は思わずつぶやく。

陽「ヨシくん……」

父「え？」

すると、ケンイチ……賢一が小さく声を上げた。

賢「うぅ…」

陽「ヨシくん！」

その声に、賢一は目を少しずつ開けていく。

賢「あ…ひな……」

父「気が付いたか？」

賢「父さんも……あれ、僕……」

そう言って陽の手から離れてその隣に座った賢一に、陽は優しく言った。

陽「私たちもわかんないわよ。…いきなり倒れたような音がしたから、慌ててヨシくんの部屋に来たの。そしたらヨシくん、ベッドの前で倒れてるんだもん。びっくりしちゃった。」

賢「倒れてた…？」

父「立ちくらみかなんかじゃないのか？今日は随分と大変だったみたいだし、疲れてるんだよ。……まあ、思ったよりも大丈夫そうだし、父さんそろそろ戻るかな。」

そう言って、陽一郎は静かに部屋を出る。

陽「…大丈夫？頭とか痛くない？」

優しくそう言う陽に、賢一もいくらか安心したような表情で言う。

賢「うん、大丈夫……」

そう言って、賢一はハッとドアの近くの壁に目が行った。そこには、何かがぶつかったような跡があり、賢一は反射的にその下の床を、陽にはわからないように見た。案の定、そこには割れたカップの残骸があった。

賢「……ゴメン、今日はもう寝るかな。……痛くはないけど、ちょっとふらふらするんだ。」

そう言った賢一に、陽も少し心配そうではあるが優しく返す。

陽「そうね、お父さんも言ってたけど疲れてるのかもしれないし……何かあったらすぐ呼んでね？」

賢「うん、ありがとう。」

そう言った賢一を見て、陽はベッドから立ち上がり、静かにドアの方へと歩いて行く。

陽「じゃあ、おやすみ。…また明日。」

賢「うん、おやすみ。」

就寝の挨拶をかわして、陽がドアを閉める。賢一は少しの間ベッドに座っていたが、陽が階段を降りる音を聞いてから、すっと静かに立ち上がって割れたカップの、取っ手のついている部分を拾った。

賢「……」

賢一は、ただそのカップの破片を見つめているだけだった。

翌日のメディア部の活動時間、部室内はなんとなく重い空気に包まれていたが、誰もその場で口を聞こうとはしない。孝彦はいつものように本を読み、佐武兄弟はわざとらしくカメラやビデオカメラのレンズを何度も拭いていて、隆平は元気なく机に突っ伏している。他の４人も、空気の重さから浮かない表情で鳩谷が来るのを待っていた。誰も言及こそしないが賢一の右手の親指を除く４本の指には包帯が巻いてある。と、その時。やっと部室のドアが開く。

鳩「入るぞー。」

晶「先生。…あの、その人たちは？」

鳩谷の声にみなドアの方を向くが、鳩谷の後ろにいる２人の女性に部員たちは気付く。

鳩「この方は梶北紗百合さん。で、こちらは紗百合さんの娘さんで、美優希さんだ。」

紹介され、紗百合と呼ばれた女性は軽く会釈をする。

晶「はあ……」

鳩「ほら、お前たち昨日、首を吊ってた中学生を助けただろう？紗百合さんはその子、友健くんのお母さんで、美優希さんはお姉さんだよ。」

その言葉に、隆平が食いつくように２人の方を見た。

紗「息子の自殺に気付いて対応してくれたのが、こちらのみなさんだと警察の方に聞いたので、お礼がしたくて。…急に訪ねたりしてごめんなさいね。」

晶「あ、いえ……こちらこそわざわざ……」

恐縮気味の晶だったが、隆平が遠慮もなしに訊く。

隆「あの！アイツどうなったんですか？！まさか死んでなんか……」

その言葉に、紗百合は一瞬不安そうな色を見せ、美優希は怪訝そうな顔をした。

隆「え……」

隆平をはじめ、部員たちもみな不安そうな顔をしたが、美優希が怪訝そうな表情のまま答える。

美「死んじゃいないよ、意識不明なだけ。アイツ、小柄で体重軽かったから、首吊りじゃあ死にきれなかったんだってさ。……ま、いつ目ぇ覚めるか、それともそのまま死ぬかはわからないって病院の先生は言ってるけどね。」

紗「ちょっと、美優希……そんな言い方ないじゃない！」

美「だって、悪いの全部アイツじゃん！勝手に自殺しようとして、通りすがりのこの子たちに迷惑かけて！父さんだって迷惑してるし、克昭だってまた機嫌悪くしちゃったじゃない！」

紗「美優希！！」

紗百合に怒鳴られ、美優希は少し悔しそうに顔を赤くする。

美「何さ…！母さんだって、アイツ起きないからって学校に休みの連絡すんのにパートに遅刻したんでしょ？あたし出るまで結局起きてこなかったし……しかも、さんざん母さんの予定振り回しといてそれが自殺するために学校休む仮病とか……マジついてけないんだけど。」

紗「仮病じゃないわ…本当に具合は悪そうだったもの……」

心配そうにそう言う紗百合を、美優希は少し「悪かった」と言ったような顔で見る。そんな２人の様子を見ていたメディア部だったが、賢一が不思議そうに訊いた。

賢「あの、克昭って？」

美「ああ、あたしの弟だよ。で、友健の兄貴さ。」

賢「そうでしたか…」

そういう賢一を見て、紗百合はふと賢一の右手の、親指以外の指に巻かれた包帯に気付く。

紗「君、その手の傷……」

そう言われて、賢一は咄嗟に手を上着のポケットに突っ込む。

賢「あ、いえ大した怪我じゃないですから……」

紗「もしかして、友健を助ける時に？」

心配そうにそう言う紗百合に、賢一は少し遠慮がちにうなずく。

紗「そう…部屋中でガラスが割れてたものね……」

その時、賢一はポケットの中の手を動かしてふっと何かに気付いたような顔をしたが、誰も気づかないうちにすぐに小さな苦笑になった。そんな中、美優希は部室の時計に目をやる。

美「ねえ、あの時計あってる？」

そう言われ、美優希と近い所にいた修丸が時計と自分の腕時計に目をやる。

修「えっと……ええ、あってますよ。４時１８分です。」

美「そ。じゃあ、あたしそろそろ仕事戻るから。」

紗百合にそう告げて、美優希はさっさと部室を出て行った。

陽「お姉さん、お仕事忙しいんですね…」

少し呆然気味にそう言った陽に、紗百合は困ったような顔をする。

紗「そうじゃないの。…確かに再就職してまだ１年もたってないから、必死なのもあるだろうけど…克昭もそうだし、美優希も友健のことなんか全然気にしてないのよ……」

海「気にしてないって、兄弟じゃないですか…！」

少し悲しげにそう言った龍海に、紗百合も悲しそうにうなずく。

紗「上の２人は歳が近いからか仲は悪くないけど、友健に対しては２人とも……ホント、兄弟なんだから仲良くしてほしいんだけど……せめて、こんな時くらい……」

そこまで言って、紗百合はハッとして部員たちを見る。

紗「あ、ごめんなさいね。見苦しいところを見せたりしちゃって……」

申し訳なさそうにそう言って、紗百合も壁時計に目をやる。

紗「じゃあ、私もそろそろ病院に戻るわ。…友健が心配だから。」

そう言って会釈した紗百合に、賢一が少し急ぎ目に声をかける。

賢「あ、すいません！」

紗「…どうしたの？」

賢「いや…その、友健くんのいた部屋にハンカチ落ちてませんでした？」

紗「ハンカチ…。さあ…？ごめんなさいね、昨日はずっと病院にいたから、家に戻ってないのよ。」

賢「そうですか……」

少し気を落としたような賢一に、龍路が不思議そうに訊く。

路「ハンカチなんてどうしたんだよ？」

賢「あ、いえ…さっきポケットに手、入れた時にハンカチ無くしたこと思い出したんです。…たぶん、友健くん助ける時にバタバタしてたから、あそこに忘れたのかなぁって…」

そんな賢一に、晶が少し呆れたように言う。

晶「ったく、ハンカチくらい別にいいだろ？」

賢「まあ、そうなんですけど…」

そう言って、賢一は少し寂しそうな顔をした。

賢「あのハンカチ、中学入る時にひなが買ってくれたハンカチだったんで……」

その話を聞いて、晶はバツの悪そうな顔をする。

晶「そ、そうだったのか…？悪い……」

賢「あ、いえ！」

そう言う賢一を見て、紗百合が小さく微笑んだ。

紗「だったら、６時くらいに家に来てくれれば、部屋の中を探してもいいわよ？それくらいには、旦那も仕事を切り上げて友健の見舞い、替わってくれるはずだから。」

賢「え、いいんですか？」

紗「ええ。家の場所はわかるもんね？」

賢「はい。…あの、すいません。大変な時なのに……」

紗「いいのよ、彼女さんからの大事なプレゼントなんでしょ？」

その一言に、部員たちは一瞬静まり返る。

紗「あら？…私、変な事でも言ったかしら？」

鳩「あの、この子…宗光は神童の彼女じゃなくて、その…姉なんですよ。」

紗「え？でも今、宗光と神童って、苗字……」

不思議がる紗百合に、陽が苦笑しながら言う。

陽「ヨシくんは、いろいろあって私のお父さんが引き取ったんです。それで、血は繋がってないけど私たち姉弟なんですよ。」

紗「ああ、そうだったの。…私ったら、彼女さんだなんて……」

少し恥ずかしそうにそう言って、紗百合はまた小さく笑う。

紗「どっちにしても大事なハンカチには変わりないみたいだし、６時頃には家で待ってるわね。」

賢「あ、はい。」

紗「それじゃあ、失礼します。」

また会釈をしてから、今度こそ紗百合は部室を後にした。そのドアが閉まるのを見送って、鳩谷が感心したように言う。

鳩「しかし、まだ意識は戻らないとはいえ、お前たちよくやったなぁ。自殺者を助けるなんて。」

晶「よくやったのは、賢一と隆平と孝彦、あと龍路の４人ですよ。自分らはどっちかって言ったら、邪魔にならないようにしてただけで……」

最後の方は苦笑気味の晶に、鳩谷が不思議そうに訊き返す。

鳩「というと？」

修「実際に応急処置をしたのが賢一くんで、龍路くんがそれを手伝って、それから現場の写真を撮って警察の方に提供したんです。で、それらの指示を出したのが孝彦くんで、隆平くんは１１９番と１１０番の通報をしてくれて。」

陽「すごかったですよ。あんな状況でも、隆平くんちゃんと向こうの話を聞いて、こっちの状況も的確に伝えてて。ねえ？」

修丸に続く陽にそう言われ、隆平はいつもよりも控えめな感じで答える。

隆「別にすごくなんかねーよ……ほら、俺コールセンターでバイトしてっからさ、人より電話慣れしてるだけだよ。」

そんな隆平を見て、孝彦が他人事のような口調で言う。

孝「だけど、ガラスの割れた音に気付いたのは、コールセンターでのバイトとは関係ないんじゃないか？」

鳩「ガラスの音？」

海「実際に人が首吊ってるのに気付いたのは賢一センパイなんですけど、賢一センパイが異変に気付いたきっかけが、隆平センパイの聞いたガラスの割れる音だったんです！」

路「隆平の地獄耳だからこそ気付けたんだろうなぁ。」

鳩「ほお、それはすごいじゃないか。」

隆「すごくなんかないっスよ…地獄耳なんて、人の内緒話を勝手に聞くようなどーしようもないモンっスから……」

鳩「おい、近宮……」

鳩谷だけでなく、部員たちは心配そうに隆平を見ていた。そんな中、やはり孝彦はその心情を悟られないように、１人本に視線を戻していた。

賢「ごめんね、付き合わせちゃって。」

陽「いいのよ、どうせヨシくん帰らないと夜ご飯食べれないし。」

暗くなった道を自転車を押して歩きながら話す賢一と、その隣を歩く陽。そして陽はその隣を歩いている隆平の方を向く。

陽「隆平くんこそ、付き合わせちゃったわね。」

隆「いや、俺が勝手についてきただけだから気にすんなって。それに、俺がついてきたから賢一もチャリ押してんだろうし。俺の方がお邪魔だったな……」

少しバツ悪そうにそう言う隆平に、賢一は快く言う。

賢「センパイこそ、気にしないでくださいよ。チャリンコ押すのも、腕立ての代わりになるし。」

そう言う賢一に、陽が笑っている。

陽「もう、ヨシくんったらすぐに筋トレのこと考えるんだから！」

賢「だってぇ…」

そう言いつつも賢一も小さく笑っていて、そんな２人を見て隆平も微笑んでいた。

賢「それにしても、ひなが付いて来てくれたのはわかるんですけど、センパイはどうしたんですか？」

ふと不思議そうにそう訊く賢一に、隆平は少しバツ悪そうに言う。

隆「その、な……ちょっと首吊りの現場っつーの？気になってさ。」

そこまで言って、隆平は慌てだす。

隆「あ、いや！別に興味本位とかじゃなくてさ！」

そんな隆平に、賢一も陽も笑っている。

賢「そんなこと、一言も言ってませんよ。」

陽「そうよ。それに、そんなに慌てなくったって、隆平くんが面白がって現場を見たがるような人じゃないことは知ってるから。」

隆「お前らぁ……」

今にも嬉し泣きしそうな隆平に、賢一が優しく言う。

賢「センパイ、ノー天気に見えて責任感強い人ですもんね。…やっぱ、気になっちゃうんでしょ？」

隆「まあな…」

しんみりとそう答えて、ふと隆平は怪訝な表情になる。

隆「って、誰がノー天気だって？」

工事現場の付近に差し掛かってうるさいからか、はたまた怒りの度がひどいのかは定かではないが、隆平の声はすごんでいる。

賢「あ、いえ…！その……」

慌てる賢一をしばらくじっと見て、そののちに隆平は笑いだす。

隆「アッハハハ！ジョーダンだって！ノー天気は俺の売りだからな、逆にいつもそう見えてるってのは嬉しいよ。」

賢「もう～、驚かせないでくださいよ！」

隆「わりー、わりー！」

そう言って、隆平は昨日のように急に眉をひそめて額に手を当てた。

隆「っつ…」

賢「センパイ？」

陽「どうしたの？」

心配する賢一と陽に、隆平はカラ元気に笑って言う。

隆「あ、大丈夫、大丈夫！ちょっと頭痛くなっただけだからさ。」

そこまで言って、陽が心配そうに言う。

陽「また？…確か昨日もカラオケ帰りにそう言ってたわね。……隆平くん、風邪でも引いた？」

隆「まさか！自慢じゃないけど、俺、風邪なんて引いたことないんだぜ？……ま、今みたいに頭が痛くなったりはよくするんだけどなぁ。」

賢「え…病院とか行かないんですか？」

隆「あー、中学ん時に１回検査してもらったけど、別に偏頭痛とかはないって言われてさ、結局ストレスだって片付けられたよ。…俺、そこまでストレスためてなんかいなかったんだけどなぁ……」

そんな話をしながら、陽がふと足を止めて道路脇の家の２階を指差す。

陽「あ、ここじゃない？梶北さんの家……」

隆「お、ホントだ。ガラス割れてらぁ。」

２階を見上げてそう言う隆平に、賢一がバツ悪そうな顔をするが、そんなことには気付かずに隆平は塀と塀の間を指差す。

隆「んじゃ、行くか。」

そう言って歩き出した隆平に、賢一も陽もついて行き、３人は玄関の前でチャイムを鳴らす。

陽「……まだ帰ってないのかしら？」

玄関の前でいくら待っても音沙汰がない様子に不思議がる陽の言葉を受け、隆平が携帯を取り出して時間を見る。

隆「あ、まだ６時なってねーじゃん。」

賢「部活、５時半に終わったから……学校からは結構近いんですね。」

隆「近いのはいいけどよ、ここで待つのか？」

陽「約束したのはこっちだし、１回帰ってまた来て、それで待たせるのも悪いじゃない。」

隆「マジかぁ…」

がっかりしたようにそう言う隆平。そんな彼らの後ろから足音が聞こえて３人は思わず振り返る。

紗「あら、待たせちゃったわね……」

そこにいた紗百合に、陽は笑って言う。

陽「いえ、私たちが早く着いちゃっただけですから。」

紗「そう。」

紗百合もにっこりと笑い、その後に不思議そうに隆平を見る。

紗「ところで、あなたも忘れ物したの？」

そう言われ、隆平は少しバツ悪そうに言う。

隆「いや、俺はちょっと……別に部屋を見たからって息子さんが目ぇ覚ますって訳じゃないけどさ、なんか気になっちまって……」

そんな隆平に、紗百合は優しく微笑んだ。

紗「…ありがとう。友健を助けてくれただけじゃなくて、そんなにも気にかけてくれて……」

隆「いやぁ……」

返答に困って、とりあえず頭をかいてそう言う隆平を、陽や賢一が微笑ましく見ている。

紗「じゃあ、今開けるからちょっと待っててね。」

そう言って紗百合はバックから鍵を取り出し、玄関の鍵を開けて中に入る。それから靴を脱ぎ、まだ靴を履いたままの３人に、玄関から見える階段を指差す。

紗「友健の部屋はこっちよ。さ、上がって。」

そう言われ、３人は少し遠慮しがちに靴を脱ぎ、階段を上り始めた紗百合に続く。

紗百合と３人が目にしたのは、至る所にガラスの破片が散らばっている、１部の窓ガラスの割れた部屋だった。

陽「ひどい……」

隆「ガラスの割れた音って……もしかして、アイツがコップやら金魚鉢やら落したり投げたりした音だったのか……？」

賢「たぶん……あと、昨日来た時はその椅子とかも倒れてたりしたんです。きっと足台にしたんでしょうけど……」

初めて現場を見た２人はその光景に驚き、２度目である賢一も複雑な表情を見せている。

陽「じゃあ、あの椅子はヨシくんたちがなおしたの？」

賢「うん。友健くんを下ろすのに使ったんだけど、大変だったよ。そんなに高い椅子じゃないから、背伸びしたって天井まで手、届かなくってさ……」

隆「そういや、外から声かけた時になんか苦労してた感じだもんなぁ。」

賢「ええ、首にかかってる輪っこの方は固すぎてほどけそうになかったんで、それで天井に刺さってた、縄を引っ掛けてあったフックごと引っこ抜いたんですよ。」

隆「なるほどなぁ……」

賢「それだって、首にかかってる輪っことフックにかかってる輪っこまでの長さがすごく短くて、引っ張れそうな部分が天井に近かったから、余計に首を絞めないように縄だけ引っ張ろうとしたんですけど、椅子の上で背伸びなんて慣れてなくて……」

そう言って両手で縄の長さを表した賢一の手の間隔は、ざっと３０センチくらいだった。

隆「そりゃ確かに短けえな…」

そんな話を聞きながら、陽や隆平同様に初めて現場を見る紗百合も何とも言えない表情を見せていた。

紗「友健……」

それから、紗百合はハッとして賢一たちの方を見る。

紗「あ、ごめんなさいね。…さ、大事なハンカチ探すんでしょ？」

賢「あ、はい……じゃあ、失礼しますね。」

そう言って部屋に踏み出す賢一を見て、陽も歩き出す。

陽「私も探すわ。」

２人とは対照的に、隆平は動こうとはしない。

紗「あなたはいいの？」

隆「俺、賢一のハンカチがどんなのか知らないんで。」

賢「黄色っぽいオレンジ色で、四角じゃなくて丸いハンカチですー！」

机の下を覗きながら、賢一がそう答えると隆平は苦笑する。

隆「俺も探せってことかよ…」

そう言って、頭をかきながら隆平も部屋に踏み出して賢一の近くに行こうとタンスの前まで来て、ふとそのタンスの上を見る。そこには、１枚の写真立てが立っていた。

隆「あれ、この写真……」

そんな隆平に気付いて、賢一も陽も、紗百合も隆平の近くに来る。隆平が手に取った写真立てに収まっている写真には、２人の男女と、小学生くらいの男の子の３人が写っていた。

陽「この子……ここにある写真ってことは友健くんですか？」

賢「でもさ、それだったら５人で写ってるんじゃないの？」

隆「ってか、紗百合さんずいぶん変わったんですねぇ。別人みてーだ。」

そんな３人に、紗百合は少し言いにくそうに言う

紗「その写真…小学生の友健と、友健の本当のお父さんとお母さんの写真なの。」

賢・陽・隆「え…？」

紗「友健はね、旦那の妹夫婦の子供なのよ。でも、交通事故で２人とも亡くなられて、それで家で引き取ったの。だから、美優希と克昭とは実質いとこの関係でね……それでも私や旦那が美優希や克昭と同じように友健に接するものだから、２人ともそれが気に入らないのでしょうね……」

そう言って、賢一を見る。

紗「君、なんて言ったっけ？」

賢「僕ですか…？神童賢一ですけど…」

紗「賢一くん……あなたたちの家庭の事情はわからないけど、なんだか似てるわね。君と友健……」

その言葉に賢一はうつむき、少し複雑そうな、そして切ない顔をする。

賢「そうですね……でも、やっぱ違う気もする。」

そして賢一は顔をあげて紗百合を見た。

賢「お姉さんやお兄さんを悪く言うつもりはないんですけど、僕は、お姉ちゃん……ひなに大事にしてもらえてるから……」

陽「ヨシくん……」

それから、賢一は少し苦笑気味に、しかし優しく笑って言う。

賢「でも、お母さんやお父さんには大事に想ってもらえてるっていうところは、似てるかもしれませんね。僕が引き取られた時にはもう、ひなのお母さんは天国に行っていたけど、ひなのお父さん…僕たちの父さんは、僕たちを本当の姉弟のように、僕もひなと同じように大事にしてくれてますから……」

紗「そう…」

そうつぶやいた紗百合は、少し寂しそうだった。その様子には気づかず、賢一は写真に目をやって言う。

賢「でも、なんかやりきれないなぁ……僕みたいに、血の繋がっていないきょうだいや父さんにも大事にしてもらえてる子供がいる中で、似た境遇で自殺をしてしまう子供もいるなんて……」

そんな賢一を見て、隆平もやりきれない顔で言う。

隆「立場が似てるぶん、そりゃ辛いよな……」

賢一は相変わらずの気を落とした様子でうなずく。と、その時、閉めておいたドアを思いっきり開ける音に皆驚き、思わず振り向いた。

克「うわ、なんだよこれ……」

そう言って、部屋に入ってきた男はしゃがみこんで金魚鉢の欠片をつまむ。

克「あいつ、首吊っただけじゃねーのかよ……」

紗「克昭……帰ったの？」

部屋に入ってきたのは、友健の義兄であり美優希の弟である梶北克昭だった。

克「ああ。ってか、こいつら何？」

紗「この子たち、友健を助けてくれた人たちなの。それで、友健を助ける時に大事なハンカチを落としちゃったらしくて……」

克「ふ～ん……だったらさっさとしろよ。」

賢一たちにそう言ってから、克昭はふっと天井近くにあるエアコンを見た。

克「おい、エアコンつけたのお前たちか？」

エアコンの方を見たままそう言う克昭に、みな驚く。

陽「エアコン、ついてるんですか…？」

そう言った陽を疎ましげに横目で見てから、克昭は小さく舌打ちをする。

克「毎日５時半にタイマーセットしてやがる……そういや母さん、今朝ここのエアコンいじってたよな？今朝、１階降りる時に見たけど、あの時セットした？」

紗「いえ……、それにしても、窓開きっ放しだったから気付かなかったわ……」

克「だったらアイツかよ……」

そう言って、克昭は机の上に無造作に置かれていたリモコンを取って、エアコンを切る。

隆「あれ…？」

その瞬間に何かに気付いた隆平。

賢「どうかしました？」

隆「ん、いや…さっきからずっと耳鳴りしてたんだけど、耳鳴りじゃなくてエアコンの音だったんだなぁってさ。」

そう言った隆平に、克昭も紗百合も少し驚く。

克「お前、何言ってんだよ？」

隆「へ？」

紗「このエアコン、音が静かだからって私が友健に買ってあげたの。…買ったのだって先週末だから、壊れてるはずはないんだけど……」

そう言う紗百合に、隆平は苦笑いをした。

隆「俺、人より耳良いから、そーいうのは基準になんないんスよ。」

克「マジかよ……」

また疎ましげな表情で今度は隆平を見た克昭に、隆平も負けずと怪訝な顔を見せる。

それから克昭は部屋の中を見回し、ふっと割れた金魚鉢の近くに歩み寄る。そこには息絶えた流金が３匹と、砂利や飾りがガラス片と共に散らばっていて、床には水がしみているような跡がある。

克「にしてもあの野郎、父さんが買ってくれた金魚までダメにしやがって……このエアコンだって、母さんが気ぃ利かせて新しく買ってくれたってのに、無駄につけたまま自殺なんてしやがって。……母さんも父さんもさ、あんな奴に気ぃ遣うことなかったんじゃね？」

紗「克昭！」

紗百合の一喝に、克昭は少し悲しそうな顔をする。

紗「……確かに私も滋さんも、友健のことは気にかけていたし、あなたたちにとってはそれが不満だったかもしれないけど…でも、友健はご両親を亡くしてるのよ？それでもあの子は、心配をかけないようにいつも明るく振る舞って……」

克「そりゃ、そうだけど……」

寂しそうにそう言って、克昭はぷいと部屋の外の方へ振り返りながら、賢一たちに対して言う。

克「とにかく、探し物だか何だか知らないけど、さっさと終わらせて帰れよ。あの死にぞこないのせいでこっちゃあ疲れてんだからな。」

紗「ちょっと……」

克昭の言葉に、紗百合や賢一、陽は反射的に悲しげな表情をしたが、隆平は口の方が早かった。

隆「おい待てよ！……弟に対して死にぞこないたぁ、聞き捨てならねーな！」

克「んだとぉ？」

明らかに機嫌を損ねた様子で振り向いた克昭にも、隆平はひるまなかった。

陽「ちょ、ちょっと隆平くん……」

慌てて止めようとする陽を、隆平は腕を出して制しながら克昭に続ける。

隆「確かに生みの親は違うかもしれねーけど、あんたら兄弟なんだろ？しかもそいつが今、生死の境で頑張ってるって時に、まるで死んでほしかったみたいな言い方しやがって！」

その瞬間、隆平の顔のすぐ近くを何かが飛んでいき、壁にぶつかった。驚いてみながその壁を見ると、そこには少しへこんだ後と、電池カバーの外れたリモコンがあった。

克「ガキが、わかったようなこと言ってんじゃねーよ！アイツのせいで俺も姉貴もイライラすることが多くなったんだ！いつも余計な面倒かけるくせに、いちいち俺らの事心配するようなこと言いやがって…それでいて父さんも俺らよりもアイツばっかり可愛がりやがって……第一、姉貴が前の仕事辞めさせられて大変な、俺が大学受験の忙しい時に狙ったように家に潜り込みやがって……ああ、そうだ！あんなヤツ死んだ方がよかったんだよ！アイツだって、この家が嫌で死にたくて首吊ったんだろうが！だったら、お前らの行為は最高のおせっかいだな！」

その剣幕に、誰も何も言わなかった。その中で克昭は再び舌打ちをして部屋を出ようとしたが…

陽「やめてください……」

その言葉に、克昭は振り返らずとも歩を止める。

賢「ひな……？」

陽「死んだ方がよかったなんて、やめてください！…話を聞いただけだったら信じたくなかったけど、お姉さんやあなたの今の態度見てわかった気がします……友健くんが自ら命を絶とうとしたのは、あなたたちのせいなんじゃないんですか？！」

隆「陽……」

克「俺たちのせいだと？…は！アイツが首吊ったのと俺らは関係ねーよ！」

やっと振り向く克昭に、陽は今にも泣きそうな、しかし意思を強く見せた顔で続ける。

陽「本当の家族を亡くして辛い心境でこの家にやってきた友健くんに、あなたたちは何をしてきたんですか？…嫉妬？八つ当たり？それが本当に彼にしてあげるべきことなんですか？！」

克「……だったらなんだよ。」

陽「そんなことしておいて、自殺するほど追い込んでおいて自分たちは関係ないなんて……あなたたちが殺したも同然じゃないですか……」

そこまで言って泣きそうに言葉を詰まらせた陽を、賢一はただただ心配そうに見ることしかできなかった。

賢「ひな……」

そしてうつむいた賢一は、ふっとリモコンが投げつけられた壁を見た。

賢「……」

そんなことには気付かず、隆平も泣きそうな陽を見てから、克昭を睨みつける。

隆「陽の言う通りだ！お前は…兄貴として最低だよ！」

克「兄貴ぃ？…は！誰があんなクズの兄貴だよ。勝手に親亡くして、勝手に親父に媚びうって……そんなクズ野郎の兄貴になった覚えはねーな！俺は美優希の弟で、死にぞこないとは赤の他人だ！」

その言葉に隆平はもちろん驚いたが、賢一という、血の繋がっていない弟を大事に思い続けてきた陽の目からは、遂に涙がこぼれ落ちた。

ケ「そんな顔すんじゃねーよ……」

陽「え……？」

その時、聞き覚えのある声が小さくそう言って陽の隣を通って克昭の真ん前まで歩いてきた。しかしまだ克昭の顔は見ずに、あえて下を向いているようだった。

ケ「お前たちが殺したも同然、か……フン。お前もうまいこと言うじゃねーか。」

そう言って陽の方を振り向いたのは、まるで克昭を嘲笑うかのような顔をしているケンイチだった。

隆「お前…ケンイチじゃねーか！」

陽「ケンイチ、くん……」

紗「けんいち…？ねえ、あの子賢一くんでしょ……？」

陽「あ、それは……」

驚いて戸惑う紗百合に説明しようとする陽だったが、それよりも先にケンイチは克昭に対してガンを飛ばしていた。

克「テ、テメー…何が言いてーんだよ！」

ケ「お前……とはまだ言えないがな、梶北友健は自分で首を吊ったんじゃない。…お前たち家族の誰かに、首を吊らされたんだ。」

克・隆・紗・陽「！」

ケンイチの言葉に、誰もが驚きを隠せなかった。

陽「どういうこと？！」

ケ「何度も言わせるな。これは梶北友健の自殺じゃなく、この家の住人である誰かによる他殺だということさ。…いや、今の段階では殺人未遂と言っておくか。」

陽「自殺じゃない……」

そう言った陽を見て、ケンイチは少し何かを考えるような顔になり、それからすぐに無表情で言い捨てる。

ケ「フン……少なくとも、梶北友健は自ら死を選んだわけではないという事だ。……くだらないことを気にしやがって。」

憎まれ口を言われたが、陽は少しだけ安心したような顔をしていた。

克「お前ふざけんなよ？！この家の住人って、俺たちの誰かがアイツを殺そうとしたとでも言うのか？」

冷静さを欠いてケンイチに食ってかかる克昭を、ケンイチは鬱陶しそうに一瞥し、面倒くさそうに言う。

ケ「だから、さっきからそう言っているだろう。何度も同じことを言わせるな、この能無しが。」

その言葉に、克昭は悔しそうに何か言おうとするが、言葉が出てこない。そんな克昭を見て、隆平もいつぞやの自分と重なるのか、複雑そうである。

紗「で、でもそんなこと……私たち家族の中の誰かが友健を殺そうとしたなんて、そんなこと……！」

感情的に、今にも泣きそうにそう言う紗百合に、ケンイチはまた先ほどの、人を嘲笑うかのような顔をする。

ケ「動機なら十分じゃねーか。…なあ？」

そして克昭を見る。

克「…は？」

ケ「お前も、美優希とかいうお前の姉も、義弟の存在が疎ましかったみたいじゃねーか。」

克「な…！」

驚く克昭を無視し、ケンイチは今度は紗百合を見る。その後ろでは、隆平が恥ずかしそうに陽に耳打ちしている。

隆「なあ、ギテイって？」

陽「義理の弟の事。…だから、私にとってのヨシくんも義弟にあたるのよ。」

隆「はぁ～、なるほどなぁ。」

そんな話をしているのを知っていて、ケンイチは２人を一瞥したが、隆平も陽もそのことには気付いていない。

ケ「それに、梶北友健を引き取った張本人である父親だって怪しいもんだ。立場上、奴を引き取りはしたが、今となって邪魔になった…なんてこともあり得なくはないだろう。」

そこまで言って、ケンイチは紗百合の方を見る。

ケ「あとはお前だが、お前も兄弟の仲の悪さを気にしている。その元凶である奴を消したいと思ったって不思議じゃない。」

紗「ちょ、ちょっと……私が友健を消したいだなんて…ふざけないで！」

取り乱す紗百合をただ見ているだけのケンイチに、陽が少し慌てて言う。

陽「ケンイチくん、今のは失礼よ……」

そんな陽を、ケンイチは静かに振り返ってみる。

陽「あ……」

そのケンイチの顔は、疎むでも怒るでもなく、ただ無表情であった。そんな気まずい空気の中、耐えきれなくなったのか隆平が話を切り出す。

隆「それよりもケンイチ！…お前、なんであの…友健、ったっけ？アイツが首吊ったのが殺人未遂だってわかるんだよ！」

そんな隆平を見て、ケンイチは静かに部屋を見渡す。

ケ「この部屋は、自殺の現場にしちゃ小さな矛盾が多すぎる。」

隆「小さな、矛盾……？」

隆平がそう言うや否や、ケンイチは賢一が立て直したとされる椅子の近くに歩いて行く。

ケ「まずはコイツだ。」

克「その椅子がどうなんだよ？」

そう言う克昭の方を向くこともなく、ケンイチは椅子の背を持って部屋の中央付近に持ってきた。

ケ「被害者が首を吊っていたすぐ近くに倒れていたのがこの椅子だ。…あれが自殺だと言うのなら、コイツを足台にしたと考えるのが普通だが……」

そう言って、ケンイチは紗百合の方を見た。

ケ「おい、梶北友健の身長はどのくらいだ？」

紗「どれくらいって言われても……確か、今年の春で１４８センチだって言ってたから……たぶん、まだ１５５はないと思うわ。…あの子、中３にしたら背が小さい方だから。」

そう言う紗百合に、ケンイチはうなずく。

ケ「だろうな。見た限りでも被害者は賢一と比べて頭１つ分ほど背が低かった。それでいて、縄の端にある２つの輪の間の長さは極端に短かったんだ…」

賢一の名を出すケンイチに、紗百合も克昭も不思議そうな顔をしているが、そんなことはお構いなしに、ケンイチは両手で３０センチほどの間を作って縄の長さを表し、それから椅子に乗り、天井を見る。

ケ「見ろよ。賢一の体ですら、椅子に乗ったうえで天井と頭…いや、首の間隔は５、６０センチはある。…つまりだ。」

そしてケンイチは椅子から降り、緊張気味にケンイチの行動を見ていた一同を見た。

ケ「被害者の身長と縄の長さを考えれば、この足台じゃ低すぎるんだよ。」

陽「そっか…確かにヨシくんより背が低くて、しかも縄の長さがそれくらいだったら、その椅子じゃ足がつかないわ。」

隆「ああ、そーいうことか！」

陽の説明に、隆平もやっと納得する。それを見たケンイチは、それには特に何も言わずに今度は机の近くの割れたコップの近くに歩み寄る。

陽「あ、危ないわよ…」

ガラスの破片を気にする陽に、ケンイチは陽を見ることもなく言い放つ。

ケ「……ったく、いちいちうるせえよ。」

そう言われて陽は少し悲しそうな顔をするが、隆平が少し怒ったように言う。

陽「ごめんなさい……」

隆「おい、気にすんなって。……アイツの言うこといちいち気にしてたらもたねーぞ？」

陽「うん……」

そんな２人は気にせず、克昭がイラついたように言う。

克「で、今度は何がおかしいってんだ？」

ケ「机の近くにあるガラス片については、まあこうしてコップ落したと考えれば違和感はない。」

そう言って、ケンイチは机の上を払うように手を動かす。その様子を、４人はもっともそうに見ている。

ケ「だが、そんなふうにコップを落としたのなら、ガラス片はこんなところにはないんじゃないのか？」

ケンイチは手を払った方向を見た。

紗「確かに……でも、それってどういうこと？」

ケ「おそらく、これは被害者を「精神が不安定な、自殺をする人間」に仕立てようとしたんだろうが、縄の長さと言い、細かいところまでは気が回らなかったみたいだな。部屋のガラス片全部が、まるで真上から落としたような位置に散らばってやがる。……精神が不安定な人間の行動を考えた時、普通は部屋中に投げつけると思わないか？…さっきのお前のようにな。」

そう言ってケンイチは克昭を一瞥した後、親指を立ててリモコンがぶつかった壁を指す。

克「…ッチ。」

ケンイチの態度が気に喰わないのか、克昭は苦々しく舌打ちをするが、ケンイチはそんなことは気にせずに、今度は割れた金魚鉢の近くに行く。

ケ「そして、今気になっていることはこれで最後だが……金魚鉢が落ちたというのに、なぜここは水浸しになっていない？鉢いっぱいの水が渇くほどの暑さでもなく、時間だってまだ１日しかたっていないんだ。」

紗・克「！」

言われて初めて、梶北の２人は驚いた。

隆「何言ってんだよ、そこ、カーペットの色が変わってるってことは、ちゃんと濡れてんじゃねーか。」

隆平は何も気づかず、もっともそうにそう言う。

ケ「ああ。濡れてはいる。…だが。」

そう言ってケンイチはカーペットを少しめくった。

ケ「カーペットの下は、水をはじくフローリングだ。床が水を吸わない以上、こぼれた水はすべてカーペットが吸収するが、それでこの染みの大きさ……落ちているガラス片から鉢の大きさを判断するに、明らかに水の量が少なすぎる。」

その言葉に、克昭は驚きを隠せないような顔をしていて、紗百合も同じように静かに話し出す。

紗「そうよ…あの子、「金魚が少しでも広く感じる様に」っていつも多すぎるんじゃないかってくらい水を入れてたのに……じゃあ、じゃあホントに友健は自殺じゃなくて、殺されかけたってこと……？」

悲しそうにそう言う紗百合に、ケンイチは無表情に言う。

ケ「まだ、誰が犯人だなんてことはわからない。それに、誰もいない部屋でどうやって奴に首を吊らせたか、ということもだ……だが。」

そう言って、ケンイチは小さく拳を握った。

ケ「生まれた謎は解き明かす。それがオレの使命だ…！」

その一言に、その場にいた全員が何かを感じたようだった。

翌日のメディア部、ケンイチは賢一に戻ることなく授業を終えて部活に出ていたが、まるで部員たちを避けるかのように１人、窓際で頬杖をついていた。部室には鳩谷、孝彦、隆平を除いた全員がそろっている。

晶「で、結局ハンカチはベランダに引っかかってたってか？」

陽「ええ……窓、開きっ放しだったから……（汗）」

苦笑する陽に、晶は少し呆れるような顔をする。

路「にしても、自殺に見せかけた殺人未遂とはな……」

ふとそう言う龍路に続き、龍海がケンイチをちらっと見る。

海「しかもまた賢一センパイ、ケンイチさんと替わっちゃったし……」

そう言う龍海に、修丸が少し慌て気味に言う。

修「龍海くん、聞こえますよ……？」

そう言って修丸もちらりとケンイチの方を見るが、ケンイチは何も反応しない。

修「…聞こえて、ないみたいですね。」

ケ「バカが……」

修丸の言葉にさりげなく言い放つケンイチに、修丸も龍海もびくつく。

修「え？！」

海「す、すいません！」

そんな龍海を一瞥して、ケンイチはまた窓の外へと目線を戻す。と、その時、部室のドアが開いて孝彦、隆平、鳩谷の３人が入ってくる。

海「あ、おかえりなさい！」

隆「おう！」

陽「なんか悪いわね、警察の事情聴取任せちゃって……」

少し申し訳なさそうな陽に、孝彦は苦笑気味に言う。

孝「別にいいよ。いいことじゃないだろうけど、最近はこういうのも慣れてきちまったし。」

そう言って、孝彦は隆平を見る。

孝「それに、昨日の現場の事話したのは俺じゃなくてコイツだしさ。」

晶「で、どうだったんだ？」

孝「本格的に、殺人事件として捜査を始めるそうです。ケンイチが言っていたことは全部的を得ていたし、遺書がなかったこととか、被害者の血液から睡眠薬が検出されたことから殺人事件の可能性は大きいって。」

そこまで言って、孝彦は疲れたような独り言を言う。

孝「まさか事件だとは思わなかったけど…一応、時間見といてよかったよ。」

路「さすが、警察の息子だよな。」

誉める龍路だったが、孝彦は悪気こそないものの疲れたような顔を見せる。

孝「よせよ…ったく、おやじのせいで変な癖が付いちまった……」

そんな孝彦に苦笑しながら、鳩谷は誰かを探すような目線で部員たちを見渡し始める。

鳩「しかし、担当の警察官、神童の推理聞いて驚いてたぞ。よくそんな些細な点を見つけられたなって。……って、神童は何やってんだ？」

不思議そうに窓際に目をやった鳩谷だが、ケンイチは反応しない。

陽「事件のこと、考えてるんだと思います。……まだ犯人や、友健くんの首を吊らせた方法がわかってないみたいだから……それを気にしてるんだと……」

鳩「そうか…しかし、自殺と他殺を見抜いただけでも、すごいと思うがなぁ。」

そう言う鳩谷に、ケンイチは振り向きもせずつまらなさそうに、また、さも当たり前とでも言うように言う。

ケ「あんなわかりやすい現場を見て、安易に自殺と判断できる警察の方が、オレはよっぽどすごいと思うが。」

その言葉に、刑事の父を持つ孝彦は苦い顔をする。

孝「仕方ねーよ…自殺事件で初動捜査に当たるのは大抵その地区の所轄の警官だから、捜査一課とかに比べて現場慣れしてないんだ。」

ケ「フン……」

その一言は、とてもつまらなそうなものだった。

隆「なあケンイチ、誰が犯人なんだ？…やっぱあの克昭とかいうやつじゃないのか？」

少し急かすような隆平の言葉に、ケンイチは鬱陶しそうに部屋の中へ向き直り、窓へよたれかかり、小さくため息をついた。

ケ「お前は感情に流されやすい。…もっと物事を考える癖をつけろ。」

その言葉の意味を、隆平は理解できていない。そんな隆平を見て、孝彦が少し呆れたように言う。

孝「ムカつくからって勝手に犯人にしようとするなってことじゃないのか？」

そう言われ、隆平は少しだけムッとする。

隆「んなこと言ってもよぉ！あの野郎、いくら親が違うとはいえ、弟を死にぞこないとか言いやがったんだぞ？！」

孝「俺にそんなこと言ったってなんにもならないだろうが。」

隆「んなこたぁわかってらぁ！」

孝「だったら言うなよ、バカ。」

隆「な、テメ！ドサクサに紛れて人の事バカ呼ばわりしやがって！」

孝「ドサクサも何も、お前はバカだろうが！」

隆「言ったな、この―」

路「で？」

わざとらしく、しかし部員たちの注目をしっかりと集めた龍路の一言に、ケンカを始めそうな勢いの２人も思わず彼の方を見る。

路「犯人のめどは立ってるのか？」

ケンイチに対してそう言う龍路を見て、孝彦と隆平は気まずそうにお互いに顔を逸らしてケンイチの方を見る。

ケ「めどなんて立ってねえよ。あの現場からわかることは、あれが自殺に見せかけた他殺……いや、殺人未遂だという事。それと、あの部屋で何かをしていても怪しまれないあの家の住人、もしくはあの家に怪しまれずに普段から出入りできる人間であれば、誰でもあの偽装自殺の現場を作ることができたという事だけだ。あとはいかんせん情報が足りねえな。」

そう語るケンイチの話を、みな真剣に聞いている。

修「あ、あの……」

何か言いたげにそう言う修丸を、ケンイチは面倒臭そうに見る。

修「１つ聞いていいですか？」

ケ「なんだよ…」

修「自殺じゃなくて殺人だとしたら…おととい、隆平くんが聞いたガラスの音は誰が立てたんですか？」

その言葉に、晶も気づいたように言う。

晶「そうだ！あの時は自殺だとばかり思ってたから本人がガラスを割ったのかと思ってたが……まさか犯人はあの時、家の中にいたのか？」

孝「いや、それはありえないですよ。自殺があった時には、警察は自殺者の家族に連絡をいれますけど、もし家の中に隠れていて携帯が鳴ったり、その電話を取って警察と話をしていたなら、さすがに家の中にいるってバレるでしょう？」

海「でも、電話に出なかったらバレないんじゃないですか？携帯って、電話が来ても鳴らないようなモードだってあるし。」

孝「それだったら警察もとっくに、その電話に出なかった誰かってのを疑うだろ？…残念だけど、担当の警官も隆平の話聞いた時に参ったような顔してたから、家族の全員に連絡はついてたんじゃないか？」

海「あ、そっかぁ……」

鳩「となると、やはりそのガラスの割れる音っていうのは、なんらかの理由で、首を吊らされる前に男の子が自分で立てたのか？」

路「そりゃ無理ですよ。隆平がその音を聞いて賢一があの子を見つけるまで、１分もなかった―」

そう言いながら、龍路はふっと気が付く。

路「…ってことは、あの状況でガラスを割れる人物はいなかったってことになるのか？」

修「ま、まさかガラスがひとりでに割れた…とか？」

怯えながらそう言う修丸に、孝彦が呆れて言う。

孝「お前なぁ、いい加減そのオカルト思考なんとかしろよ？地震でもないのに、勝手にガラスが割れるかっつの。」

修「そ、そうですよね……」

安心したようにそう言う修丸だったが、ふとケンイチが口を開く。

ケ「まんざら、あり得ない話じゃないかもしれないがな……」

その一言に、皆驚く。

陽「どういうこと？……まさかケンイチくんまで、心霊現象とか言うんじゃ―」

ケ「寝言は寝て言え。」

陽の言葉を遮ってそう言い放つケンイチに、陽も自分で言ってて苦笑している。

ケ「オレが言いたいのは、犯人は何かトリックを使って、無人……いや、被害者である梶北友健だけがいる部屋でコップやら金魚鉢やらを割ったんじゃないかってことだ。」

海「トリック……？」

鳩「…だが、男の子が部屋にいる状態で何か仕掛けをしても、それが作動する時に犯人が彼を見ていなかったら、その仕掛けをなんとかできたんじゃないのか？」

ケ「そんなことは、いくらでもなんとかなる。」

鳩「いくらでもって……」

首をかしげる鳩谷に、ケンイチは表情も口調も変えずに続ける。

ケ「あの縄の短さ、おそらくあれは被害者をあの部屋の中の高い位置から動けないようにするためのものだろう。」

隆「高い位置って、そんな人が乗れるような場所なんてあったか？」

ケ「クローゼットの上……あそこで間違いないだろうな。」

陽「間違いないって……」

ケ「椅子に乗った時についでにクローゼットの上を見てみたら、案の定、埃が不自然に払われたような跡があった。おそらく、被害者は首を吊る直前まであそこに寝かせられていたんだ。縄の短さのために起き上がることもできず、縄をほどくために首に手を回すことも満足にできない状態でな。」

その説明に、陽や隆平は現場をじっくりと見ていた手前、ただただ驚くだけだった。

晶「クローゼットの上に寝かせて、か……でもケンイチ、首に縄をかけられてクローゼットの上に置かれるなんて、そんなこと普通はさせないだろ？」

不思議がる晶に、ケンイチは横目で晶を見てから話を続ける。

ケ「被害者の血液から出たという睡眠薬、おそらくあれは被害者に抵抗させないために犯人が飲ませたものだろう。男とは言え被害者はもともと小柄だ、寝かせてしまえば首に縄をかけてクローゼットの上に寝かせるなんて、足場さえありゃ、男はもちろん女でも楽にできるだろうからな。」

路「そりゃ確かに、眠っていたなら作業もしやすいだろうけど…でも、睡眠薬なんて飲ませたら他殺だってすぐバレるんじゃないか？今回はお前が他殺だって見破ったから血液検査とかもしたみたいだけど、遺書とかがないんだから、お前が他殺だって見破ってなくても、検査とかする可能性もデカいだろ？」

ケ「そんなことはなんの問題でもない。睡眠薬が検出されたところで、オーバードーズの可能性を示唆すりゃ済むからな。」

路「オ、オーバードーズ？…なんだそれ？」

ケ「簡単に言えば、服薬自殺の事だ。聞いたことないか？睡眠薬を大量に摂取して自殺を図った、なんて話を。」

部室を見待たすようにそう言うケンイチに、孝彦が思い出したように言う。

孝「確かによく聞くな、自殺の方法の１つで睡眠薬を大量に飲むって。」

孝彦の言葉を受け、ケンイチは孝彦にと言うわけではなく、何かを嘲笑うかのように微笑する。

ケ「まあ、実際はとんでもない量の睡眠薬を服薬しないと、オーバードーズなんてできないんだがな。……死にたいと思うくせに簡単に死のうとするなんて、ムシが良すぎると思わないか？」

そんなケンイチを見て、陽は人知れず悲しそうな顔をしたが、それに気付いてもいないのに、ケンイチはすぐに真剣な表情になる。

ケ「…話が逸れたな。とにかくだ、犯人は、被害者が首を吊る直前まで、クローゼットの上に首に縄をかけて満足に身動きできない状態で寝かせていたのはほぼ確実だ。そうしておいて犯人は安心して、その場に居ずともコップや金魚鉢など、ガラスを落とせるような何かを仕掛けたんだろう。」

そう言ってケンイチは一息つき、部員たちの緊張は高まっていく。

修「それで、その仕掛けっていうのは……」

沈黙の中そう訊く修丸を、ケンイチは静かながらに睨む。

修「あ！す、すいません……！まだわかってないんですよね……？」

オドオドとそう言う修丸を少しの間睨みつけていたケンイチは、ふっとつまらなさそうにうつむく。

ケ「わかってんなら訊くんじゃねーよ、バカが……」

修「ご、ごめんなさい……」

落ち込む修丸。そんな修丸を一瞥してから、ケンイチはおもむろに立ち上がり、何も言わずに部室の出入り口の方へ歩き出す。

晶「お前、どこ行くんだよ？」

驚いて声をかける晶に、ケンイチは立ち止まりはするものの、振り向かずに答える。

ケ「ここにいたって、新しい事実が発覚するか？…しないだろ。」

陽「ねえ、まさか梶北さんの家に行くつもり？」

心配そうにそう訊く陽に、ケンイチは少しの間黙っていたが、歩き出すと同時に答える。

ケ「オレがどこに行こうと、オレの勝手だ……」

そうだけ言って、ケンイチは部室のドアを閉めた。その様子を見ていた部員たちはみな唖然としていたが、陽だけは一層心配そうにうつむいていた。

孝「どうした、陽？」

陽「あ…えっと―」

落ち込んだ様子の陽に気付いた孝彦はそう声をかけるが、それに答えようと陽が顔をあげた時、隆平が呆れたように言う。

隆「訊かなきゃわかんねーのか、イシアタマ？」

孝「はあ？！誰がイシアタマだ！」

隆「お前に決まってんだろうが！んなこともわかんねーのかよ！」

孝「俺がイシアタマだったらお前は能無しバカだろうが！」

隆「てめ！いっつもバカの１つ覚えみてーにバカバカうるせえんだよ！」

孝「事実なんだから仕方ないだろうが、このバカ―」

晶「だー！！２人ともうるさい！！」

龍路の仲裁が入る前に、今回は晶の堪忍袋の緒が切れたようである。晶は怒鳴った勢いで席を立ちあがっている。

路「セ、センパイが怒った……」

海「うわ、こっわ……」

晶の怒鳴り声にビビってそんな事を言っている２人を気に留めるでもなく、晶は少し落ち着いて孝彦と隆平の方を見る。

晶「お前たちはホンットに飽きないな！…ったく、陽の気持ちも考えてやれ！」

そう言われて、孝彦と隆平はやっと気づいたように少しバツ悪そうに陽の方を向く。

孝「わ、悪い陽……」

隆「あー……あれだな、俺らもガキだったな……」

そんな２人を苦笑いして見ている陽や、呆れたように見ている晶。

陽「そんな、謝られることはないんだけど……」

そう言って、陽はまた複雑そうな表情をしてうつむく。

孝「けど？」

陽「ううん、なんでもないの。」

そう言って少し無理をするように笑う陽に、鳩谷が心配そうに訊く。

鳩「神童が心配なのか？」

その問いに、陽はまたうつむく。

修「ケンイチくん、誰が相手でも歯に衣着せませんからねぇ……」

陽にそう言う修丸の言葉を聞いて、龍路や龍海もお互いに納得するように話し始める。

路「それでいて、事情を知らない人からしたら賢一が豹変したように見えるからなぁ…」

海「だよねぇ。ケンイチさんを放っておいたら、賢一センパイの印象が悪くなっちゃうかもだし、僕が陽センパイだったらやっぱ心配だなぁ。ねえ、センパイ？」

そう龍海に振られて、陽が悲しそうに顔をあげる。

陽「違うの……印象とか、そういうことじゃないの……」

海「え？」

思わず聞き返す龍海。龍路も少し驚いている。

陽「私、ケンイチくんがつぶれちゃわないかが心配なの……」

路「つぶれるって…どういうことだ？」

陽「ケンイチくん、何か大きな苦しみを１人で抱えているみたいなの……ヨシくんを守るために……」

晶「賢一を守るため……？」

そう訊く晶に、陽は少し悩んだ後、意を決して晶の方を見た。

陽「おととい…友健くんを助けた日の夜、私、ケンイチくんに会ったんです……」

隆「ケンイチに会った？！……って、昨日はアイツまだ賢一だったじゃんか！」

孝「もしかしてアイツ、俺らが知ってる以上に頻繁に賢一と入れ替わってるのか？」

驚く隆平に続き、孝彦も驚きを隠せない表情をしている。

陽「ううん、こんなことは今回が初めてよ…今までは事件が起きてケンイチくんが出てきてくれて、事件が解決したらヨシくんに戻って……それだけだったから。でも…おとといの夜は違ったの……」

そう言って１度黙り込む陽に、鳩谷が静かに言う。

鳩「一体、何があったんだ…？」

陽「あの日の夜、私たち、お父さんに友健くんを助けたことを話してたんですけど、その時からなんかヨシくんの様子が変だったんです……今年に入ってから、メディア部の周りで人が死ぬことが多いって気にして……」

修「あー…言われてみればそうですね。去年はそんなこと、１度もなかったですよね。」

晶「ああ。去年もだし、自分が１年だった一昨年もそんなことはなかったぞ。…ってか、事件なんて滅多に会わないもんだと思ってたからなぁ……」

そう言う晶に、孝彦が冷静に言う。

孝「そうでもないですよ、事件なんて東京だけでも毎日のように起きてますからね。」

鳩「そうか、お前の父さんは刑事だからそう言う話も聞くんだな。」

孝「そりゃ、事件の詳しい話なんて聞けませんけど、よく愚痴ってるんですよ、世の中事件が多すぎるって。」

そんな話をしていた孝彦や鳩谷だったが、ふと話を逸らしていることに気付いてバツ悪そうに陽の方を向き直る。

孝「あ、そういうことじゃないよな、お前の話って。悪い……」

そういう孝彦に、陽は少し笑顔を作って言う。

陽「ううん、別に大丈夫よ。」

路「それで？続き聞いてもいいか？」

陽「ええ。…それでね、その後はお互いに部屋に戻ったんだけど、それから少ししてヨシくんの叫ぶ声が聞こえて、心配になって部屋に行ったら……ケンイチくんがいたの。」

晶「その時、入れ替わったのか……」

海「あ、でも、その声ってもしかしてケンイチさんが叫んだんじゃないんですか？」

ふとそう訊く龍海に、陽は少しだけうつむいて言う。

陽「私もお父さんも、最初はそう思ったわ。でも、後から訊いたら、叫んだのはヨシくんだって、ケンイチくん言ってた。」

修「……でも叫んだって、賢一くん一体どうしたんです？」

心配そうに訊く修丸に、陽も少し不安げな顔色が戻ってくる。

陽「ヨシくんに何があったかは教えてくれなかったけど、もしケンイチくんと入れ替わらなかったらヨシくんの心は死んでただろうって。…いつもは入れ替わってもお互いに感じたことを知っているはずなのに、それもできないくらいに混乱してるって…そう言ってたわ。実際にヨシくん、ケンイチくんと入れ替わってたことすら気づいてなかったみたいだった。」

修「入れ替わりにも気づかないほどの混乱ですか…」

陽「ええ…でも、ケンイチくんもなんだか様子が変だったの。ひどく取り乱してたって言うか…お父さんに、ヨシくんを疎んだのはお前じゃないのかって言ってた。その後すぐに、自分の言ったこと否定してて……」

そう言って、陽はケンイチの言葉を思い出した。

―ケ「賢一を１番疎んだのはテメーじゃねーのかよ！」―

―ケ「くそっ…！違う！宗光じゃねぇよ…！宗光陽一郎じゃねぇ！……」―

隆「お前の父さん、賢一に何かしたってのか？」

陽「ううん、違うと思う。…きっと、ヨシくんが記憶を失った原因は、ヨシくん本当のお父さんにあるんだと思うの。」

路「賢一の、本当の父さんか……まあ、賢一と両親が死別していなければ、どこかにはいるよな。」

納得するようにそう言う龍路だったが、陽はまた一層不安げな顔をする。

陽「ヨシくんの記憶を取り戻すことは大事なことだと思ってた…けど、あんなケンイチくん見たら、どうしたらいいのかわからなくなって……」

そこまで話して、陽はまた心配そうにうつむく。そのことに気付いたのは…

隆「よし、俺も梶北さん家行ってくる！」

そう言って立ち上がったのは隆平だった。

陽「え？」

孝「おい、お前が行ってどうすんだよ？」

驚く陽に呆れる孝彦だったが、隆平はまず孝彦に対してムッとする。

隆「お前なあ、あからさまに人をバカ扱いすんのやめろって。」

そう言って、今度は強気な顔で陽を見る。

隆「陽お前さ、ケンイチの事が心配だけど、ケンイチの言葉も気になってんだろ？」

海「ケンイチさんの言葉って？」

隆「ほら、なんか「どこ行ったってオレの勝手だー」とかなんとか言ってたろ？」

海「あー、確かにそんなこと言ってたような。」

鳩「だが、それを気にするってのは？」

隆「先生もニブいなぁ。あんなこと言われて、アイツの後をついて行けるほど陽も図太くはないっしょ？…なあ？」

隆平に振られ、陽は苦笑気味に、しかしどこか悲しそうにうなずいて言う。

陽「なんだか、ついてくるなって言われた気がして……ケンイチくん、私の事を鬱陶しがってるみたいだから……」

そんな陽に、隆平が得意げに言う。

隆「だから！俺が行くんだよ！…俺はケンイチに何も言われてないからな、その分気も楽だぜ！」

晶「ほお、お前にしちゃあ気が利くな。」

感心する晶に、隆平はなお得意そうである。

隆「でしょお！」

孝「頼むから、仲裁できる人間のいないところでケンイチとケンカなんかすんなよ？」

隆「うるせえよ！…じゃ、走りゃあ追いつけるだろうし、俺行ってきまーす！」

そう言って、隆平は自分の荷物をカバンに乱雑に詰めて、それを持って部室を出て行った。

鳩「近宮のやつ、お調子者なだけじゃあないんだなぁ。」

感心する鳩谷だったが、龍路がふと何かに気付く。

路「…あれ？でも隆平の奴、なんでカバンまで持ってったんだ？」

晶「…！アイツ、まさかこのまま帰る気じゃ…！」

晶の一言に、部員たちは皆ハッとなった。

学校と梶北家の中間あたり、隆平は１人で歩くケンイチの背中をやっと見つけた。

隆「おい！待てよケンイチ！」

その声に気付いたケンイチは、気怠そうに振り向いた。

ケ「なんだよ？」

隆「なんだよじゃねえよ！お前１人で出歩かせたら誰にケンカ売るかわかったもんじゃねえからな！」

ケ「…フン。お前と一緒にすんな。第一、お前らがバカな頭で勝手にケンカを売られたと勘違いしてるだけだろう？」

隆「バ…！お前まで俺の事バカって―」

ケ「事実だ。それに、はっきり言うがオレ以外の人間みんなバカだと思ってる。」

そう言い切ってから再び歩き出すケンイチを、隆平はもはや呆気にとられてしばらく見ているだけだった。

隆「言い切りやがった……って！だから待てよ！」

そう言って隆平はまたケンイチを追いかける。

梶北家の玄関の前で、ケンイチは律儀にもチャイムを押していた。

隆「…出ねえなぁ。」

そう言う隆平に何も言わず、ケンイチは道路の方を向く。

隆「って、おい！どこ行くんだよ？！」

ケ「賢一が割った窓から入る。」

隆「おい（汗）…お前、それ泥棒だろ！…ってか、お前賢一と違って運動神経悪いんじゃなかったか？」

そう言われて、ケンイチはとても不機嫌そうな顔で隆平の方に振り向く。

隆「…何怒ってんだよ（汗）？」

ケ「わかりきっている事を言われれば、腹も立つだろうが…」

隆「あ、もしかして運動オンチなの気にしてんのか？」

ケ「……フン。」

その時、ふいに玄関の戸が開いた。

滋「えっと、君たちは？」

そこに立っていたのは、ケンイチも隆平もあったことのない男性だった。

隆「あ！あの、俺たち閏台高校のメディア部で…」

少し驚き気味に答える隆平に、男性は温和な笑顔を見せた。

滋「もしかして、友健を助けてくれた学生さんかい？いや、妻から話は聞いてるよ。」

隆「いえ…助けたっても、その……」

どもる隆平を少しに気につつも、男性は話を戻す。

滋「すまないね、病院に持って行く物の整理をしていて、チャイムが聞こえなくてね。１階に降りたら話し声がしたから気付けたようなものさ。」

そう言って苦笑いする男性に、ケンイチがいつものつまらなさそうな表情で訊く。

ケ「お前、梶北友健の父親か？」

その言葉に隆平が慌てる。

隆「バ、バカ！…すいません！コイツ、礼儀知らずっつーか、そのぉ……」

ケンイチの態度に慌てる隆平に、男性は快く言う。

滋「いや、いいんだよ。私はそういう事、気にしないから。……えっと、そうだよ、私は友健の父親の梶北滋というんだが、まあ大きい企業という訳ではないがこれでも一応、ＫＡＪＩ工業という工業メーカーの社長をしているんだ。」

隆「え…ＫＡＪＩ工業って、有名な会社じゃないっスか！そこの社長とか、すげーッスね！！」

感心する隆平だったが、ふとケンイチがイラつき始めていることに気付く。

ケ「おい、どーでもいいこと喋ってないで現場を見せろ。」

隆「お前な、だからその口のきき方なんとかしろよ…！」

その一言に再び隆平は慌てるが、滋は不思議そうに訊く。

滋「現場…？」

隆「あ、いや…その、友健くんの部屋のことっス。……友健くんが自殺じゃないって気付いたの、コイツなんですよ。」

滋「そうか、君が！…そういうことならぜひとも見てほしいものだ。警察も今日は新しいことは見つけられなかったみたいだしな。」

そう言って滋は家の中の方へ向き直る。

滋「さあ、上がってくれ。…妻は友健の見舞いで家を空けてて、美優希は仕事でいないんだがね。」

ケ「長男はどうした？」

滋の言葉の中に克昭がいないことに鋭く気付いたケンイチに、滋は苦笑いをする。

滋「ああ、克昭はもう大学からは帰っているんだが、友健の事となるといつも機嫌を悪くするんだ。だから、部屋にはいるんだが……君たちが来ていることは言わない方がいいだろうな。」

そう言って歩きはじめる滋に続いて家に上がる隆平に、ケンイチも何も言わずについて行った。

友健の部屋に着き、滋と隆平が見守る中ケンイチは静かに部屋の中を注意深く見ながら歩き始めた。

滋「しかし彼が、友健が自殺じゃないと見破った子だったとは……」

隆「アイツ、今までもいくつか事件を解決してきてて、すっげー頭いいんすよ。口は悪いんですけどね。」

滋「事件を？それはすごい！」

隆「ただ、気を悪くしないで欲しいんですけどね、なんかアイツ、滋さんのことも疑ってるみたいなんですよ。」

そう言われて、滋は苦笑いする。

滋「ああ、それも妻から聞いたよ。私たち家族の中に犯人がいるんじゃないかって話だろう？」

そう言って、滋は少し悲しそうな顔をする。

滋「信じたくはないが、しかしそれほど頭のキレる彼が言う事なら、事実なのかもしれないな……」

隆「滋さん……」

そんな中、ケンイチはおもむろに友健の机の引き出しを引いていた。

ケ「……」

何も言わずにケンイチは紙の束を引き出しの中から取り出した。それに気付いた隆平と滋も、不思議そうにケンイチのもとへと歩いてくる。

隆「おい、勝手に見ていいのかよ……」

心配そうにそう言う隆平にはお構いなしに、ケンイチは紙をめくっていく。

ケ「手紙だ……それも、１週間前の日付の……」

隆「へ？」

またもや隆平を無視し、ケンイチは滋に手紙の束を差し出す。

ケ「お前たち家族への手紙だよ。……お前、実の息子を差し置いて梶北友健に会社を継がせようとしてたんだな。」

その言葉に、滋は少し辛そうな顔をする。

滋「……そのことが書いてあるのか？」

ケ「ああ。…まあ、読んでみりゃわかるだろうよ。」

そう言って手紙を差し出すケンイチだったが、滋はそれを受けとらなかった。

滋「…それは、遺書なのかい？」

ケ「いや…」

滋「だったら、あの子が目を覚ました後に本人から受け取ることにするよ。」

ケ「そうか。」

それから、滋は悲しそうにうつむいた。

滋「そうか、友健がそのことを手紙に書いているのか……」

ケ「内容から考えれば、そのことを言われてすぐに書いたものだと思うが。」

ケンイチがそう言うと、隆平は少し恐る恐ると滋に訊く。

隆「あの、その会社を継ぐって…？」

滋「……別に克昭を嫌っての事じゃないんだ。だが、克昭には今ひとつ思いやりが欠けている気がしてね、うちの長男だからと会社を継がせるには少しためらいがあった。しかし本人は長男の自分が会社を継ぐのは当たり前だと思っていたようでね。そんな中で妹夫婦が２人とも事故で死んでしまって、１人残された友健を引き取ることにしたんだが…少し臆病でも、優しくて思いやりのあるあの子の内面を知れば知るほど、社長には友健の方が向いているような気がしてきてね、それで先週、友健を跡継ぎにすると言ったんだ。…だが、そのせいで克昭はあからさまにわかるほどに友健を憎むようになってしまった。美優希もそんな２人との関わりを面倒くさがるようになってしまったし……」

隆「そっか、だからあんなにひでーことを平気で言うのか……」

滋「紗百合だって、そんな亀裂の入った兄弟３人に随分と気を使っていた……今回の出来事の元凶は、私なのかもしれないな……」

そう話す滋をじっと見てから、ケンイチは手紙の束をじっと見た。

ケ「この手紙、少し借りてもいいか？」

その言葉に滋は少し不思議そうだった。

滋「…かまわないが、どうして？」

ケ「んなこと、どーでもいいだろうが。」

隆「おいこら―」

ケ「アイツが目覚める前には返す。」

隆平の言葉を遮って言葉を続けたケンイチに、隆平は思わず言葉を呑んだ。

滋「…ああ、頼むよ。」

その言葉にケンイチは珍しく、小さくも優しく笑ったようだった。

ケ「…ああ。」

そんなケンイチを、隆平は不思議そうに見ていた。

梶北家を後にして、隆平はなぜか１人、電信柱の影に隠れてケンイチと距離を置いていた。

隆「（アイツ、病院なんかに行って何する気なんだ……？）」

そう思って、隆平は梶北家を出た直後の事を思い出していた。

―学校とも陽の家とも違う方向に向かおうとするケンイチに、隆平が不思議そうに気付いた。

隆「おい、お前どこ行くんだよ？」

ケ「…何度も言わせるな。オレがどこに行こうと、オレの勝手だ。」

そうだけ言って歩き出すケンイチに、隆平は何も言わずに疑わしい顔をするだけで、しばらくケンイチの背中を見て立ち止まっていた。―

隆「（この方向でケンイチが行くところったら、友健くんの入院してる病院しかねーじゃねーか…ったく、普段は賢一とはいえ、あんなのと一緒に暮らしてる陽の苦労は計り知れねーな。）」

そう考える隆平の肩にふいに誰かの手が乗り、隆平は驚く。

隆「うわ！」

陽「ご、ごめんなさい！」

思わず振り向いた隆平と目があったのは、帰り支度を済ませた格好の陽だった。

隆「な、なんだ陽かよ！…ったく、驚かすなって！」

陽も最初は隆平同様に驚いていたが、にわかに小さく笑いだす。

陽「だから、ごめんって！…隆平くん耳いいから、とっくに気付いてるかと思ったんだもん。」

隆「あのなぁ、そりゃ誰か歩いて来てるなぁってのはわかっけど、まさかお前だとは思わねえよ…ってか、部活もう終わったの？」

陽「ううん、晶センパイがね、「ケンイチのこと気にしてんじゃ、部活も集中できないだろう」って、それで帰っていいって言われたの。まあ、早退みたいな感じかしら。…それよりも隆平くんは何してるの？こそこそストーカーみたいなんだけど……」

不思議そうにそう言う陽に、隆平は真剣そうに前方を指差した。

陽「あ……」

隆「ケンイチがさ、例の「ついてくんな」的なこと言って友健くんのいる病院の方に行くから気になってさ。……なんならお前も来る？」

そう言われ、陽も真剣にうなずいた。

病院について、ケンイチは入院病棟のフロントで友健の病室を聞いた後、エレベーターに向かう。そんなケンイチを、隆平と陽はギリギリ病院内である少し離れた場所で見ていた。

隆「あのヤロ、な～にが「賢一」だよ…」

陽「え？」

呆れたように言う隆平に、陽も思わず聞く。

隆「ケンイチがさ、フロントで名前訊かれて「神童賢一」って言っててよ。ったく、こんな時には賢一の名前使いやがって……」

陽「隆平くん、この距離で聞こえるの……？」

違うことにツッコむ陽に、隆平は思わず少しムッとした。

陽「あ、ごめんなさい…（汗）」

隆「とにかく！俺の地獄耳は放っておいて俺らも友健くんとこ行こうぜ？…ケンイチにバレないようにさ。」

陽「そうね……」

そう言ってお互いに顔を見合わせ、２人もフロントへ向かった。

２人が静かに病室の外から友健のいる病室を覗いてみると、そこには眠っている友健の手に手紙を握らせているケンイチの姿があった。その姿を見て、陽も隆平も何も言わずにただただその姿を見守っていた。

ケ「……死ぬなよ。」

その言葉に、陽は言葉はなくとも驚いた。２人が病室の外にいることも知らず、ケンイチは言葉を続ける。

ケ「これは、お前が自分の手であの４人に手渡さなきゃなんねーモノだ。お前が死んだら、誰があの家族を救うんだ？……負けんなよ。境遇なんかに負けんな。お前はオレよりも、賢一よりもずっと強いんだ。……おまえを殺そうとした犯人はオレが絶対に暴き出してやる……！だから、死ぬんじゃねーぞ……」

友健に誓うケンイチの姿を見て、陽は思っていた。

陽「（ケンイチくん……もしかして、謎を解き明かしたいとか、ヨシくんの過去とかに関係なく、ただ純粋に友健くんを想って……）」

その時、近くの病室でガラスの割れるような音が聞こえた。

陽「きゃ！」

隆「な、なんだぁ？！」

驚いた隆平は音のした方を見たが、そんな隆平を陽は慌てて見ている。

陽「あ、隆平くん…！」

陽にうながされて隆平が咄嗟に病室の方を見ると、案の定、ケンイチが病室の外を見ていた。それも、感情もろくにわからないような無表情な顔で……

隆「ヤベ……」

そう言う隆平に、ケンイチは表情以上に落ちたトーンで言い放つ。

ケ「テメェ、つけてきやがったのか？」

隆「い、いや、その……！だ、だって気になるじゃんか！お前の向かった方向って、明らかここしか思いつかなかったし！なあ？！」

そう振られ、陽は少し気まずそうにうなずく。

ケ「ったく、お前まで来るとはな……」

陽「ごめんなさい……」

謝る陽には何も言わず、ケンイチは踵を返して病室に戻る。

ケ「オレはもう帰る……お前らも用事がないなら、とっとと帰れ。」

そう言いながら友健に握らせた手紙を制服の内ポケットに入れて２人の方を向いた。

陽「う、うん……私たちも帰ろう？」

隆「そうだな…」

そう言いあう２人をつまらなさそうに見てからケンイチは病室を出て、２人を追い越してエレベーターの方へと歩き出した。

ケ「行くぞ。」

そんなケンイチを、陽も隆平もどこか不思議そうに見ていた。

病院の外で、またもやケンイチは陽や隆平とは違う方向へと歩き出そうとした。

陽「ケンイチくん、どこ行くの？」

そう言う陽を、完全には振り向きもせずに疎ましげに見たケンイチだったが、ケンイチが口を開く前に隆平が強気に言う。

隆「どこに行こうがオレの勝手だ！…とは、言わせねーぞ！！お前の事を心配してくれてる陽の気持ちも少しは考えろよな！」

そう言われ、ケンイチは面倒臭そうに２人の方を振り返り、内ポケットから友健の手紙を取り出した。

ケ「コイツを返してやろうと思ってな。」

陽「何、それ？」

ケ「梶北友健が家族に…今の家族の４人に宛てた手紙だ。」

隆「さっき友健くんの部屋見た時にさ、コイツ、友健くんの机の中から見つけたんだよ。それで友健くんの父さん…滋さんに了解してもらって借りてきたんだけど……」

陽にそこまで説明して、隆平はケンイチの方を向く。

隆「だけど、滋さんもあの様子じゃ病院に行くみたいだったしさ、家に行ったっているのはあの息子さんだけだろ？チャイム鳴らしても出ないんじゃないか？……そりゃあ、元の場所に戻したいってのもわかる気もするけど……」

ケ「大丈夫だ。病室に来た看護師から聞いた話じゃ、母親はさっきオレと入れ違いで家に帰ったそうだ。…アイツなら家に入れてくれるさ。」

そう言ってまた歩き出すケンイチに、隆平は少し呆れている。

隆「お前、ちゃっかりしてんなぁ……」

そう言って歩き出す隆平に、陽も苦笑しながら歩き出す。ケンイチは相変わらず２人の少し前を歩いていたが、ふと隆平が陽に対して聞く。

隆「でもアイツ、なんで病院に手紙なんて持ってったんだろうな？」

そんな隆平に、陽はわかっている、といったような顔で言う。

陽「友健くんを励ますためじゃないかしら？…って、隆平くんも見てたでしょ？」

隆「いや、まー見てたっちゃ見てたけど、その、さ……アイツがそんな人を励ますとか、ちょっと信じられないっつーかさ―」

その時、隆平がふと顔をしかめて額に手を当てた。

陽「どうしたの？…もしかしてまた頭痛？」

隆「まあ、な…ったく、ホント困るよな！原因不明の頭痛とかさ！」

投げやり気味にそう言う隆平だったが、それからふと悩ましげに言う。

隆「でも不思議だよな？ここでは初めてだけど、結構おんなじところでおんなじように頭が痛くなるんだぜ？それに、少し歩いたら治るのも変な話だしよ……」

陽「えー、なんか怖いなぁ…もしかしたら修丸くんの分野なんじゃないの？」

隆「う～ん…でも確かに、ここまで来たら医者よりもアイツのオカルトを頼った方がいい気がしてきた……」

冷や汗を垂らしながら悩む隆平だったが、２人の前を歩いているケンイチがひどく呆れた口調で言う。

ケ「お前ら、何度も言うが寝言は寝て言え。近宮の偏頭痛の原因はおそらく……―！」

そう言ってケンイチは振り返って、ついさっき通り過ぎた、道路の脇にエンジンをかけたまま停まっているトラックを見た。そしてその瞬間にケンイチの脳裏には今まで集めた事件の情報が駆け巡る。

―克「毎日５時半にタイマーセットしてやがる……」

紗「そうよ…あの子、「金魚が少しでも広く感じる様に」っていつも多すぎるんじゃないかってくらい水を入れてたのに……」

修「ま、まさかガラスがひとりでに割れた…とか？」

陽「きゃ！」

　隆「な、なんだぁ？！」―

ケ「まさか……いや、だとすれば……！」

１人、何かに驚くケンイチを陽も隆平も不思議そうに、そしてケンイチ同様に驚いたように見ている。

陽「ケンイチくん…もしかして犯人がわかったの？！」

陽の問いに答える様子もなく、ケンイチは踵を返して走り出した。

陽「あ、ケンイチくん！」

隆「今度はどこ行くってんだよ？」

呆気にとられてそう言う隆平に、陽は少しだけ考え込んだ後にふと言う。

陽「もしかして、学校…？」

そう言ってから、陽と隆平は顔を見合わせて慌てだす。

隆「ど、どこにしたって、俺たちも行こうぜ？！」

陽「うん！」

隆平にうながされて、陽はケンイチが走って行った方へと走り出した。

陽「あの、ケンイチくん来ませんでしたか―」

部室のドアを開けながらそう言った陽と、陽と一緒に部室に入ってきた隆平を、部室に残っていた部員たちや鳩谷、そして２人よりも早く部室に来ていたケンイチが見た。

鳩「どうしたんだ、お前たち？」

晶「２人ともさっき帰っただろうが……もしかして忘れ物か？」

隆「違いますよ！…ってかケンイチ、お前やっぱり学校戻ってたのかよ…」

ケ「フン……」

隆平の言葉にそうだけ言い放ち、ケンイチは目線を今まで向けていた机の方に戻す。

隆「ッカー！かわいくねーやつ！」

そう言って頭をかく隆平だったが、陽はケンイチの目線につられて目線をずらす。そこには、机の側に散らばったガラス片と、机に背を向けている「卓球部」と書かれた扇風機があった。

陽「それ、もしかして例のトリック…？」

そう訊く陽に、修丸が感心したように答える。

修「ええ、びっくりしましたよ。本当にグラスが勝手に割れちゃったんですから！」

路「いきなり部室に来るなり、「扇風機とガラス製のグラスを持ってこい」なんていうからさ、家政部でグラス借りて卓球部で扇風機借りて…大変だったんだぜ？」

苦笑いの龍路に、隆平は少し驚いた顔をする。

隆「じゃあ、やっぱりトリックがわかったって事だったのか……」

そんな話の中ケンイチは壁時計に目をやり、それからふと鳩谷の方を向く。

ケ「おい、病院行って梶北友健の見舞いに行ってる父親を家に戻しに行け。」

いきなりそう言われて、鳩谷は少し驚いている。

鳩「よ、呼び戻す…？」

孝「そんなことして、どうするんだよ？」

鳩谷同様に少し驚く孝彦に、ケンイチは席を立ちあがりながら言う。

ケ「梶北の人間４人に容疑をかけたのはオレだ。」

そしてまた鳩谷や孝彦ら部員たちの方を見る。

ケ「なら、関係のない３人から容疑をはらすのは最低限の責任だろう？」

海「あ、でも今から家に行ったって、お父さんはいいとして他の３人もいるとは限らないんじゃないですか？」

ケ「いるさ。母親は家に帰ったと看護師が言っていた。それに、兄の方はさっきすでに家にいたし、玄関にあった姉の仕事のシフト表では、この時間はもう仕事は終わっている。」

そうだけ言って、ケンイチはさっさと部室を後にする。

陽「あ、待って！」

とっさにケンイチを追って部室を出る陽に、同じく隆平もつられて部室を出た。そんな様子を少しだけ呆然と見ていた部員たち。

鳩「とりあえず、病院行ってくるよ。」

そう言って立ち上がる鳩谷に、龍海は少しバカにするように言う。

海「先生、ケンイチさんの言いなりですかぁ？」

鳩「いや、だってアイツ怒らせるの怖いだろ？」

海「あー、確かに……」

鳩谷に言われて、龍海も納得する。

鳩「じゃあ、ちょっと病院まで行ってくるから、響鬼。」

晶「ハイ？」

鳩「部活終わらせるんなら、部室の鍵だけ頼むな。」

それだけ言って鳩谷は部室を出て行った。

晶「…ってーことは、鍵だけちゃんとすれば、部長権限と自分の独断で部活終わってもいいってことか？」

悩ましげにそう言った晶に、修丸が反応する。

修「あの、だったら僕、ケンイチくんの推理を聞きに行きたいんですけど……」

海「あ、僕も僕も！」

ややはしゃぎ気味にそう言って、龍海は龍路を見る。

海「ねえ、兄ちゃんも聞きたいよねぇ？」

路「そうだなぁ、確かにケンイチの推理は気になるな。」

乗り気な龍路を見て、晶はふと孝彦の方を見る。

晶「で、お前はどうする？自分も正直、事件の真相は気になるし、行こうと思ってるが…」

そう言われて、孝彦は少し困った顔をする。

孝「俺１人だけ残るのは嫌ですよ。…てか、センパイわかってて聞いてません？」

晶「まさか。お前はどっちかって言ったらみんなで行動するのは嫌いそうだからな、一応聞いてみただけだったんだけどさ。」

孝「まあ、確かにそーいうのは好きじゃないですけど、この部活のメンバーだったら別にかまいませんし…それに、俺的には隆平の奴が犯人わかった時とか頭に血ぃのぼらないか心配ですし。」

いつものそっけない調子でそう言った孝彦だったが、部員たちがにわかに笑いだしたことに、孝彦は少し向きになる。

孝「な、なんだよ……」

修「あ、いえ…なんだかんだで、やっぱり孝彦くんと隆平くんって仲いいなあって思いまして！」

孝「誰と誰の仲がいいって…？」

視力が悪いせいで常に細い孝彦の目が、さらに細くなって修丸を睨む。

修「いや、その！えっと……」

思わぬ（？）反撃にビビる修丸だったが、そんな２人に未だこらえ笑いをしている晶が言う。

晶「まあいいじゃないか、誰と誰が仲良くたって！ほら、満場一致なんだからさっさと部室出るぞ？でないと鍵もかけれんからな。」

そう言って晶は荷物を取ってドアの前に立つ。

修「は、はい～！」

晶の言葉に、修丸は逃げるようにカバンを取って部室の外に出る。

孝「ったく……」

続いて、少し不機嫌そうに部室を出る孝彦を未だこらえ笑いをしながら、佐武兄弟も部室を出た。

晶が部室の鍵を職員室に戻すのを待って、小走りで学校を出た５人は、学校よりも目的地に近い辺りの道を歩いているケンイチ、陽、隆平に追いついた。先に歩いていた３人の中でもやはり最初に彼らに気付いたのは隆平である。

隆「あれ、アイツら……」

１人振り返ってそう言う隆平につられ、ケンイチや陽も振り返る。

陽「みんなも来たんだ…」

どこか安心したようにそう言う陽の隣で、ケンイチは無表情のまま前を向きなおして歩きはじめる。

陽「あ、待って！」

陽が慌ててケンイチに会わせて歩き始めるが、隆平は５人のもとへと小走りで駆け寄った。

隆「センパイ、どうしたんですか？」

晶たちと合流した隆平にそう言われ、晶は少し苦笑気味に言う。

晶「あー…いや、その…なあ？」

うまく話せなくなって龍路を見る晶に、龍路は少し呆れたような苦笑いをして隆平の方を向く。

路「先生が晶センパイに「鍵だけちゃんとしたら部活終わっていい」って言ったんだけど、そしたらみんなしてケンイチの推理が聞きたいってことになってさ、それで慌てて部活終わらせて走ってきたんだよ。」

晶「とどのつまりは、そーいうことだ。」

孝「それよりも、話なら歩きながらしましょう？ケンイチに置いてかれる…」

呆れているようにそう言った孝彦に、晶はハッと気づいたように言う。

晶「それもそうだな…」

それから歩き出した晶につられて他の５人も歩き出す。

隆「にしてもみんなしてって……」

珍しく呆れる隆平に、孝彦が相変わらずの調子で言う。

孝「それは龍路の言葉足らずだ。」

海「言葉足らず？」

孝彦の言葉に不思議そうな顔をして反応した龍海は、隣を歩く龍路の顔を見る。すると龍路は苦笑いをして孝彦に言う。

路「ああ、そうだったな、悪い。」

海「ねえ、言葉足らずってどゆこと？」

路「俺、さっき「みんなして」っつったけど、孝彦は別にケンイチの推理が聞きたくてついて来た訳じゃないだろ？」

海「あ、そっかぁ！」

その会話に、今度は隆平が反応する。

隆「はあ？じゃあお前なんで来たんだよ？」

孝「なんでもいいじゃねーか、そんなこと…」

まるで照れ隠しのように少しムキになる孝彦を隆平は不思議がる。

修「孝彦くん、犯人わかった時に隆平くんの頭に血がのぼったら大変だって心配して来てくれたんですよ？」

何気なくそう言う修丸だったが、孝彦は部室を出る時のようにまた細めた目で修丸を睨む。

孝「修丸ッ！」

修「す、すいません！！」

隆「んだよ、誰が頭に血ぃのぼるって？」

隆平は隣を歩いている修丸や孝彦を見て、不満そうにそう言ってから、前を向きなおす。

隆「余計なお世話だ、イシアタマ！」

しかし、言葉とは裏腹に、振り返った時の隆平の顔には嬉しそうな笑顔があった。

孝「こら、誰がイシアタマだ！このバカ！」

隆平の表情に気付かずにいつものようにムキになる孝彦だったが、隆平は食いつくことなく、振り返る。

隆「悪かったよ、ほら、走るぞ？」

そう言った隆平の顔は、振り返った時と同じく優しかった。

孝「あ、ああ……」

小走りになる隆平につられて孝彦も走り出し、そんな２人を晶たちは少しの間歩を止めて呆然と見ていた。

晶「なんか、隆平の奴嬉しそうじゃなかったか？」

海「あ、センパイもそう思います？」

路「俺もそう見えたけど…気のせいじゃなかったか……（汗）」

修「やっぱり…仲いいですよね、あの２人…」

そう言った修丸もなぜか嬉しそうだったが、３人揃って呆れた顔で修丸を見ていた。

修「え、なんですかみんなしてそんな目で……」

そんな修丸に答えることなく、晶が歩き出す。

晶「さ、自分らも走るぞ～…」

路・海「は～い……」

修「あ！ちょっと待ってくださいよー！」

先に走り出した３人に、修丸も慌ててついて行った。

ケンイチが梶北家に着いた時には、すでにメディア部の８人は合流していた。ケンイチがチャイムを鳴らして、誰かが出てくるのを待っている間、晶がひそひそと隆平や陽に話しかけている。

晶「なあ、ついみんな連れて来ちまったけど……ケンイチに怒られないだろうか？」

隆「今更ですか（呆）？」

陽「大丈夫ですよ。…ケンイチくんが怒る時は、事件解決が滞る時ですから。」

晶「そ、っか…そういや前にもそんなこと言ってたな…」

その時、玄関の扉が開く。

紗「あら…あなたたち……」

出てきたのは紗百合だった。

晶「あ、自分ら閏台高校のメディア部です…その、急にお邪魔しちゃってスイマセン……」

申し訳なさそうにそう言う晶に、紗百合は疲れの見える顔で、しかし優しく微笑む。

紗「大丈夫よ。…また、何か気になることでもあったの？」

隆「あ、いや……」

困ったように晶や陽の顔を見る隆平だったが、そんなことお構いなしにケンイチが口を開く。

ケ「お前以外の家族は帰ってるか？」

紗「え？いえ…滋さん、旦那が友健の見舞いに行ってるけど……」

ケ「あとの２人は？」

紗「２人って、美優希と克昭のこと？」

ケ「ああ。」

紗「美優希はさっき帰ってきたし、克昭も今日は講義が早めに終わる日だから、今は２人とも部屋にいるけど…でも、それがどうしたの？」

不安そうにそう訊く紗百合に、ケンイチはどこか不敵な笑みを浮かべて言う。

ケ「……喜べよ。お前の息子を殺しかけた犯人がわかったぜ。」

紗「え…？！本当に？」

思わず驚く紗百合に、ケンイチは小さくうなづく。

ケ「ああ。現場に居ずして首を吊らせた方法も、犯人が自ら出したボロもな……それで、だ。いつまでも無実の３人に何も言わないのも不親切だろう？だから容疑者４人…いや、犯人を除く３人にまとめて犯人を教えてやろうと思ってな。…父親が帰ってくるまで、現場の部屋で待たせてもらうぜ。」

そう言って、ケンイチは紗百合の横を通って玄関に入る。

孝「おい、勝手に入っちゃまずいだろ？」

少し戸惑い気味にケンイチを止めようとする孝彦に、紗百合は苦笑して言う。

紗「いえ、それは構わないけど……」

そう言って紗百合がケンイチの方を見ると、ケンイチはすでに靴を脱いでいたが、ふとその動きを止めて靴のかかとを踏んだ状態で紗百合の方を向いた。

ケ「なあ、割ってもいいグラスか何かないか？…なんなら、水さえ入っていれば、すでに割れていても構わない。」

紗「割ってもいいグラス…？ちょっと待ってね……」

そう言って紗百合も玄関に入り、外にいる部員たちの方を見る。

紗「あなたたちも上がって。そこじゃ寒いでしょ？」

晶「あ、じゃあ失礼します……」

そう言って中に入る晶を筆頭に、みな順々に玄関に入って行く。その間に紗百合はリビングへ行っていた。

路「なあ、割れたグラスって、またあの実験するのか？」

紗百合がリビングへ行っている間に龍路が不思議そうにケンイチに訊く。

ケ「ああ。部室と現場じゃ若干条件が違ってくるからな。」

孝「…って、お前！それじゃあ、あのトリックを確信してここに来たわけじゃないのかよ？」

ケ「バカが、寝言は寝て言え…」

そう言われ、孝彦は少し食い下がる。

海「じゃあ、なんでここでも試すんですか？」

ケ「必死こいて考えついたトリックを、目の前であっさり見破られてみろよ？……その時の犯人の顔なんか、考えただけで面白いだろ？」

そう言うケンイチの顔は、たまに見せる不敵な笑みが浮かんでいた。

晶「お前、ホンット賢一と違って性格悪いな……」

ケ「フン……」

呆れたように言う晶に、ケンイチは相変わらずの表情で言い放つが、陽はふとその表情に何かを感じ取った。

陽「（違う…きっと、ケンイチくんは面白がるために実験をするんじゃないんだ……）」

修「陽さん…？どうしました？」

考え込むような様子の陽を、修丸が心配する。

陽「え？いえ、別に……」

咄嗟に元気を装ってそう言いつつも、陽はケンイチの方を見ていた。と、その時、紗百合がリビングから玄関に戻ってきた。

紗「お待たせ。これ、次の燃えないごみの日に捨てようと思ってたんだけど、使えるかしら？」

そう言って紗百合が持ってきたのは、新聞紙の上にのせてある、取っ手の辺りが割れたコーヒーメーカーのジャグだった。中には、こぼれないくらいの水が入れてある。ケンイチはそれを新聞紙ごと受け取って、少し眺めた後に紗百合の顔を見る。

ケ「ああ。ゴミに出すものなら使えなくしても問題ないな？」

紗「ええ、好きにしていいわよ。」

そういう紗百合に何も答えず、ケンイチは階段の方を見る。

ケ「とりあえず現場の部屋、借りるぜ。…父親が帰ってきたら、子ども達連れて来てくれ。」

そうだけ言って、ケンイチは階段を上り始める。

隆「あ、おい俺たちは？！」

ケ「来たけりゃ勝手に来い。…ただし邪魔はするなよ。」

階段を上りながらそう言うケンイチに、隆平は呆気にとられている。

晶「じゃあ、自分らも失礼しますね……」

そう言って晶も階段に向かい、それにつられるように６人も階段へ向かった。その中でも、最後尾の陽は階段を上り始める前に、小さく紗百合に会釈した。

美「ちょっと！あんたたちいい加減にしてくれる？！」

克「警察でもねーくせに何度も何度も上がり込みやがって！」

美優希や克昭が怒鳴りながら現場の部屋に入ってきたのは、ケンイチたちが現場の部屋に入ってから２０分ほど後の事だった。２人の後ろには両親も立っていて、４人が部屋に着いた時、ケンイチは手のひらの上に少しだけ水の入った先ほどのジャグを乗せていた。

滋「落ち着きなさい、２人とも！」

美「はあ？父さんこそさ、自分の家で好き勝手やられて何黙ってんのよ！」

食って掛かる美優希だが、滋は落ち着いたまま答える。

滋「好き勝手じゃない。彼らは彼らなりに友健のことを心配してくれてるんだぞ？」

紗「そうよ。顧問の先生だって、わざわざお父さん呼びに病院まで来てくれて、しかも今は友健のこと看ててくれてるんだから……」

克「ったく、母さんも父さんも、友健、友健うるせえよ……」

ぼやくようにそう言う克昭に、滋も紗百合も物悲しそうに顔を見合わせている。そんな家族のやりとりを何も言わずに見ていたケンイチが、ふとつまらなさそうに口を開いた。

ケ「つまらん言い合いは終わったか？」

その言葉に、美優希と克昭は敵意をむき出しにしたような表情でケンイチたちの方を見る。

克「おい、お前確か、友健を殺そうとした犯人がわかった、とかぬかして俺たち集めたんだってな？」

ケ「ああ、そうだ。」

克「っは！ずいぶんな自信だな！……で、もし間違ってたりしたらどうすんだ？そんときゃ、名誉毀損で訴えてやっからな！」

ケ「訴えられるものなら…な。」

小さく、いつもの不敵な笑みを浮かべてそう言ったケンイチに、克昭は不意を突かれたように驚いた。

克「ど、どーいう意味だよ…？！」

ケ「オレは確信の無い推理を話したりはしない。…そういう事だ。」

その言葉に、克昭は言葉を失う。美優希もどこか驚いたような表情をしていて、紗百合と滋はケンイチを不安そうに見ている。

修「あんなこと言って、大丈夫なんでしょうか……」

修丸も、ケンイチの言葉を心配してオドオドし始めるが、その隣で隆平が真剣にケンイチを見たままに言う。

隆「さあな…でも、アイツが言うんだから間違いないんじゃねーか？…なあ？」

そう言って隆平が同意を求めたのは陽だった。

陽「うん…私もそう思う。」

そう言ってケンイチを見る陽にケンイチも視線を合わせ、それから部屋の真ん中に立って梶北の４人を見据えた。

ケ「じゃあ、そろそろ始めるか…」

そう言って、ケンイチはジャグを机の真ん中あたりに置き、ポケットから数枚の写真を重ねて出した。

ケ「２日前、この部屋で梶北友健が首を吊った。…いくつかの奇妙な矛盾を残してな。…何人かには昨日も話した内容だが、もう一度確認していく。」

そう言って、ケンイチは持っている写真の２枚を４人に見せるように持つ。

ケ「１つ目の矛盾は、踏み台の高さと縄の長さだ。」

ケンイチが見せた写真には、賢一が友健を助ける時に外した縄が写っていた。

晶「あの写真、お前が撮ったやつか？」

ケンイチの話を聞きながら、晶が龍路に訊くと龍路はうなずく。

路「ええ、孝彦に言われて、友健くん助ける時に撮った現場の写真です。今日の部活始まる前にケンイチに「現場の写真を貸せ」って言われて渡しといたんですよ。」

孝「そういやセンパイ、その時まだ部活に来てませんでしたからね。」

そんな話など気にせず、ケンイチは話を続ける。

ケ「これに写っているのは、そこに立っている椅子と、被害者の首にかかっていた縄だ。つまり、自殺に見せかけるために使われた道具という事になるが……」

そう言って、ケンイチは椅子を持ってクローゼットの前に来た。

ケ「両端の輪を除いた縄の長さはおよそ３０センチ。」

そして、昨日のように椅子の上に乗る。

ケ「被害者はオレよりも頭１つ分ほど小柄だったが、オレですらこの椅子を使う場合には縄の長さは５，６０センチを要する。…つまりだ、この縄と足台では、自殺は成り立たないことになる。」

そう言われ、初めてこのことを知った滋や美優希はどこか納得したような顔をしている。

ケ「さらに、だ。縄の長さと部屋の構造、首を吊っていた位置から考えれば、被害者が首を吊る直前まで、首に縄のかかった…しかも縄の短さゆえに首から外すことも、ろくに身動きもできない状態でそこの上に寝かされていたことも容易に想像できる。」

そう言って、ケンイチはクローゼットの上を見上げる。

ケ「実際見てみればわかると思うが、そのクローゼットの上には不自然に埃が払われた後もあるわけだしな。」

美「でも待ってよ、首に縄かけてクローゼットの上に寝かせるって…そんな殺されるのがわかってるような状態で、普通大人しくなんかすると思ってんの？」

美優希の反論を聞いて、同じような話を部活で聞いていたメディア部員たちは各々に苦笑したりしている。そんな中、ケンイチはまた４人の方を見る。

ケ「被害者の血液から、睡眠薬が検出されている。」

美「睡眠薬？じゃあ何、アイツを薬で眠らせて、その間に首に縄かけてあの上に寝かせたって言うの？」

ケ「ああ、そうだ。」

あっさりと答えるケンイチに、紗百合は少し不安げに言う。

紗「でも、それじゃあすぐに、自殺ではないとバレるんじゃ……」

ケ「自殺に見せかけるのなら、オーバードーズ…服薬自殺の可能性も示唆することができる。睡眠薬の検出など問題ではない。」

克「はあ？どういうことだよ？」

不満そうにそう言う克昭の後ろで、滋が納得したように言う。

滋「そうか、事故に見せかけるのなら睡眠薬を飲ませたりなんかしたらすぐに殺人だとバレてしまうが、自殺に見せかけるのなら、たとえ体内から睡眠薬が出てきたとしても、睡眠薬を飲んで死のうと思ったが死ねなくて首吊りにした…とかの言い訳ができるという事か…！」

ケ「ああ。…眠らせてしまえば、あの小柄な体が相手なら男も女も関係なく、首に縄をかけてクローゼットの上に寝かすことはできるだろう。あとはその場に居ずとも、被害者が勝手に首を吊ってくれるんだからな。」

淡々と語りながら机の前に移動するケンイチに、紗百合が不思議そうに言う。

紗「勝手にって言っても……それこそ、友健がクローゼットの上で動かなければ首は吊らさらないんじゃない？だったら、誰かが帰ってくるまで動かずに待っていれば……」

紗百合の話を聞いて、修丸と龍海が話し出す。

海「そうですよね、家族が犯人だとしても、３人は犯人じゃないんですから、助けてもらうまでじっとしてればいいですもんね。」

修「……クローゼットから落ちたら死んでしまうとわかってて、それでもあんなことになったということは……それこそ、自分で降りたとしか―」

その時、ケンイチが思いっきり机をたたいた。机をたたく音はもちろん机に乗せていたジャグも落ちこそしなかったが音を立てた。

修・海「うわっ！」

陽「きゃ！」

部員の中でも机の近くにいた修丸、龍海と陽が思わず驚き、修丸は思いっきり縮こまってしまっている。他の部員や梶北の４人は、ケンイチの行動に驚いていた。

路「どうしたんだよ、急に……」

修「そうですよぉ！驚かさないでください！」

泣きそうな声でケンイチにそう言う修丸に、ケンイチは机を見たまま言う。

ケ「よかったな湯堂、高い所に居なくて……」

修「え…？」

一瞬意味が解らなかったものの、修丸はハッとしてクローゼットの上に目をやる。

海「どうしたんですか？」

修「もし、今あの上にいたとしたら……僕、確実に下に落ちてました……」

にわかに怯えだしながらそう話す修丸の話を聞いて、ケンイチは梶北の４人を見て口を開く。

ケ「被害者は**少し臆病**で、優しくて思いやりのある性格なんだそうだな……」

その言葉は、特に最初の「臆病」が強調されていた。

紗「ええ…でも、友健の性格なんて話したかしら？」

少し不思議がる紗百合だったが、その隣では滋が説明する。

滋「私がしたんだ、さっき家に来てくれた時に、話の流れでな。」

紗「そうだったの……」

そしてケンイチを見る２人に、ケンイチは修丸の方をちらりと見て言う。

ケ「いきなり、見えないところでガラスの割れる音なんかしてみろ。…臆病な人間なら、奴のように咄嗟に体が動いてしまうだろうな。そして家族であれば、被害者の臆病な性格などは理解しているだろう。」

その言葉に、４人全員に緊張が走る。

美「で、でも！あの時あたしは仕事に行ってたし、克昭は大学、母さんはパート、父さんも会社の工場に居たんだよ？！どうやってアイツを驚かすって言うのさ！そんなこと無理に決まって―」

ケ「できるさ……」

美優希の言葉を遮ってそう言ったケンイチに、美優希は思わず驚く。

美「え……」

ケ「コイツと、コイツを使えばな……」

そう言ってケンイチは机の真ん中に置いておいたジャグを机の端に置き、同じく机の上に置いてあったエアコンのリモコンを手に取った。

克「エアコンと、割れたジャグで？」

ケ「まあ、水の入るガラス類なら何でも使えるし、実際に使われたのはこの部屋で割れていたグラスや金魚鉢だったんだろうがな。これはあくまで代用だ。」

そう言ってから、ケンイチは４人に向かって問う。

ケ「ところでお前たち、共鳴振動って知ってるか？」

紗「共鳴、振動……？」

美「何、ソレ…？」

眉をしかめたり、不思議そうな顔をする梶北の４人を見て、ケンイチは小さくいつもの笑みを見せて、リモコンをエアコンに向けた。

ケ「説明するよりも、見た方が早いな……」

そして、ケンイチはエアコンをつけ、数秒ごとに風の強さを変えていく。少しの間はエアコンから風が出るだけで何も起こらなかったが、ケンイチが何回目かのボタンを押したその時……

克「な、なんだよこれ？！」

克昭が、そして他の３人も驚いて見ていたのは、机の上に置いておいたジャグだった。なんとジャグは、誰も手を触れていないにもかかわらず、徐々に徐々に机の外側へと動いて行く。

美「うそ……気持ち悪っ…！」

そして、そんな事を言っているうちにジャグはついに机から落ち、粉々に割れてしまった。ケンイチはその様子や、その事に驚く一同を一瞥してから一息ついて口を開いた。

ケ「あらゆる物体には、外部からの波や振動に反応する性質がある。そして、その波や振動が、物体の持っている固有振動数に近づけば近づくほどに共鳴し、同じ固有振動数を与えられた時にはこのように目に見えるほど大きく振動するんだ。…それを共鳴振動と呼ぶ。」

そこまで言って、ケンイチは一息つく。

ケ「固有振動数は物体の大きさで変わってくるが、その物体の形状が容器状なら、中に水などを入れて調節することで、同じ固有振動数に変えることだって可能だ。…金魚鉢の中の水が明らかに少なかったのは、他のガラス類と同じ固有振動数にするために水の量を調節したからだろう……」

その説明に、みな難しそうな顔を見せるが、孝彦だけがなんとか納得したような顔をしているのを隆平は目ざとく見つける。

隆「おい、俺らにも分かるように説明しろよ……」

孝「いや、俺だって自信はないけど…つまり、どんな物体でも、それぞれが持ってる固有振動数とか言う数値と同じ数値の振動を加えたら、今みたいに目に見えるように細かく震えるってことで、大きさが違う物体でも中に入れる水の量を調節すれば同じ振動でも震えるってことだと思うけどさ……」

その説明にも、隆平は難しそうな顔をする。

隆「全然わかりやすくねーよ！」

孝「俺に言うな、バカ！」

隆「誰がバカだ、誰が！」

今にもケンカが始まりそうだったが、その時に滋も先ほどの孝彦のような顔をしてケンイチに言う。

滋「じゃあ、今のはエアコンの出す風の振動がそのジャグの持つ固有振動数に近づいたという事なのかい？」

ケ「まあ、そんなもんだ。ただ厳密に言えば、ジャグと水の持つ固有振動数とエアコンの発する低周波が一致した、という事だがな。」

晶「低周波？…また予告もなく新しい言葉出しやがって…（汗）」

ケ「低周波は、人の耳には聞こえない周波数を発する音の事だ。だが、聴覚が敏感な人間には、何らかの影響を及ぼすこともある。」

孝「聴覚が敏感…おまえの事じゃないか？」

ケンイチの話を聞いて、孝彦は思わず隆平を見る。隆平もケンイチの話に少し驚いていて、ケンイチに訊く。

隆「なあ、もしかしてその何らかの影響ってのに、偏頭痛はあるのか？！」

その言葉に、ケンイチは小さく笑う。

ケ「ああ、あるとも。頭痛だけじゃなく、耳鳴りや吐き気、めまいなども低周波によって引き起こされる症状だ。そして、低周波を放つ物は日常生活の中に溢れ返っている……たとえば、部室での実験で使った扇風機…自動販売機…道路工事の振動…稼働中の車のエンジン……」

まるでわかっていて言っているようなケンイチに、隆平は静かにも驚く。

隆「じゃあ…俺の偏頭痛ってもしかして……！」

ケ「もしかしなくとも、異常聴覚による低周波公害で間違いない。……低周波公害は原因そのものの撤去は難しいかもしれないが、低周波を発するものに近づかなければ症状も出ない。低周波による頭痛の感覚がわかっているのなら、意図して低周波を浴び続けなければ大丈夫だろう。」

その説明に、隆平は安心したように言う。

隆「そっか、近づかなきゃいいんだな……」

ケ「今回はお前に感謝してやるよ……お前の偏頭痛の理由を考える機会でもなければ、低周波などにはたどり着けなかったかもしれないからな。」

隆「へ…？マジで？」

急に褒められて驚く隆平を見て、ケンイチは小さく目を閉じ、そしてもう一度目を開けた時には、そのまなざしは鋭いものとなっていた。

ケ「話を戻そう。…あのエアコンは確かに常人の耳には不快な音を漏らさない作りになっているが、それだけ、音のうるさいエアコンよりも構造は複雑だ……そして、構造が複雑であるほど発せられる低周波は強くなる。犯人は、扇風機や普通のエアコンを使うよりも確実に被害者を殺そうと、こんなエアコンを選んだんだろうな……」

そう言って、ケンイチは４人のうちの１人を睨むように見る。その視線に気付いた陽が、驚きを隠せずに言う。

陽「もしかして…犯人って……」

その言葉に、ケンイチは先ほどと目線をずらさずにうなずく。

ケ「ああ……この部屋に…梶北友健にエアコンを与えたのはあんただったよな、梶北紗百合……」

その言葉に、紗百合はもちろん、他の３人も驚きを隠せなかった。

紗「ちょっと待って…！それは、私が友健を殺そうとしたと言いたいの？！」

その言葉に、ケンイチは少し面倒くさそうな顔をする。

ケ「おい、そこまで言わねーとわからないか？」

その言葉に、紗百合は悔しそうに言葉を呑む。

克「お前、バカも休み休み言えよ！…そりゃこのエアコンを友健に買ってやったのは母さんだけど、でも！姉貴も言ってたじゃねーか！アイツが首吊った時、俺たちはもちろん、母さんだって家にはいなかったんだぞ？！」

滋「そうだよ…確かにエアコンと水の入ったガラス容器を使えば、身動きのできない友健を驚かせてクローゼットから降ろさせることは可能だという事はわかった。でも、それは友健が首を吊る直前にエアコンを作動させなければ不可能じゃないか！」

妻を疑われて、さすがに平静を保てない滋のまくしたてるような発言を無表情のまま聞いているケンイチを、陽は不安そう見ている。

紗「そうよ…私は友健が首を吊る直前なんて、パート仲間と一緒に仕事をしていたんだから、エアコンをつけに家に戻ったりなんかしたらすぐにバレてしまうじゃない……仕事に出てからだって、一度も１人になったりはしてないわよ……」

少し余裕を持つように胸の前で片手を握っている紗百合に、ケンイチは不敵に笑う。

ケ「そんなもの、タイマーをセットすれば済む話だろう……」

紗「！」

海「タイマーって、つけたい時間にエアコンをつけたり、消したりするやつですか？」

ケ「ああ。大抵のエアコンにならついている機能だし、実際、昨日ここに来た時にタイマーが毎日５時半にセットされていたと言っていたよな？」

そう言ってケンイチが見たのは克昭である。

克「あ、ああ……言ったけど……リモコンに表示されてたし……」

母の劣勢に、克昭は滋とは対照的にだんだんと声が小さくなっていく。

その言葉を聞いて、ケンイチは今度は孝彦の方を見る。

ケ「幾永、お前確か事件が起きた時に時間を見ていたな？」

孝「ああ…まあ、事件が起きてから少し経った後だったけど、賢一が首吊りを見つけてベランダに登った時点では５時３０分ちょっと過ぎだったぜ？……―！」

孝彦は自分の言葉に意味に、そして他の部員たちや梶北の４人も孝彦の言葉の意味に気付く。

孝「ってことは、隆平がガラスの音を聞いたのは５時半ぴったりってことか？！」

その言葉にケンイチはうなずき、再び克昭を見る。

ケ「それから、お前は母親がエアコンをいじっている姿を見た、とも言っていたな？」

克「あ、ああ……」

ケ「その時家にいたのは？」

克「え…姉貴も父さんももう出てたから、俺と母さんとアイツだけだけど……」

ケ「では、お前は母親の後にエアコン、もしくはそのリモコンをいじったか？」

克「いじって、ねーけど……」

その言葉を聞いて、ケンイチの口元は小さく笑う。そしてケンイチは紗百合を見据える。

ケ「つまり、最後にエアコンの設定を変えたのはあんたなんだよな？」

そう言われ、紗百合は少し開き直るかのように言う。

紗「た、確かにあの日の朝、最後にエアコンをいじったのは私だけど……でも、タイマーをセットしたとは限らないじゃない！それに…あなたは私が友健にエアコンを買ってあげたことや、あの日の朝に私がエアコンをいじったってだけで私を犯人だって言ってるけど、そんなの何の証拠にもならないわ！もしかしたら私以外の誰かが、エアコンを買った後に友健を殺そうと思いついたのかもしれないし、タイマーだって、友健本人がセットしてた可能性だってあるじゃない！」

克「誰かって…俺たちの事かよ…？」

紗百合の言葉に、克昭はどこか悲しそうに反応した。

紗「ち、違うわ……！そう、そうよきっと友健よ。やっぱり、あの子は自殺だったのよ。あなたはちょっと考えすぎなところがあるみたいだし……」

そういう紗百合を見て、ケンイチはまるで憐れむような目つきをする。

紗「な、何よ……」

ケ「確かに、現場や被害者の状態から確実と言える情報は、踏み台の高さと縄の長さから自殺は不可能だという事、エアコンが毎日５時半にセットされていた事、金魚鉢の周りの水の量から考え、落ちていたガラス片は共鳴振動によって落ちたという事ぐらいで、お前がそれらをやったとは言い切れない。」

紗「ほ、ほら！だったら私は犯人なんかじゃ―」

ケ「だがお前は、オレが共鳴振動のトリックに気付くよりも早く、自らが犯人だと名乗ったも同然なんだよ。」

紗「え……？」

その言葉に、その場に居た全員が驚く。

陽「犯人だと名乗ったって……それってどういうこと？」

そう訊く陽を一瞥し、ケンイチは美優希の方を向く。

ケ「お前、自殺騒動のあった翌日に母親と一緒にメディア部に顔を出したよな？」

その問いに、美優希は自信なさげにうなずく。

美「行ったけど…」

それからケンイチは、おもむろに包帯が巻いたままになっている自らの右手を見せる。

ケ「では聞くが、お前はこの手を見て何か感づいたか？」

そこまで言って、ケンイチはバカにするように小さく鼻で笑う。

ケ「いや、包帯を巻いていることにさえ、その短気な脳みそじゃ気付いてなかったかもしれないか…」

その言葉に、美優希はカッとして食いつく。

美「バカにしないでよ！そりゃ、気付いちゃいたけど、あたしに関係ないことにいちいち口挟むの面倒じゃん！」

ケ「まあ、そいつはごもっともだが。で、なぜお前はコレが自分と関係ないと思った？」

コレとは、右手の事である。

美「だって、あんたがどこで何して怪我したかなんてあたしにわかる訳ないでしょ！」

ケ「そうだな、普通はそう思うよな。…でも、お前の母親はコレを見て心配してくれていたぞ？」

美「…！」

ケンイチのその言葉に、美優希はハッとしておもむろに紗百合を見る。

紗「ど、どうしたの……？」

美「母さん、さ…あの時確か、言ってたよね……？」

紗「だから、何を…？」

美「部屋中でガラスが割れてたって…」

紗「…！」

そんな会話を聞いて、修丸が不思議そうに言う。

修「そう言えばそんなことも言ってたような気がしますけど……でも、そんな驚くようなことじゃないんじゃ……」

しかし、その意見を聞いて龍路は気付いたように言う。

路「あれ…でもさ、確かあの時は紗百合さん、まだ家には戻ってないって……」

その言葉に、他の部員たちもにわかに驚きだす。そして、ケンイチはにわかに包帯をほどきだした。そこには、湿布の巻かれた４本の指が現れ、切り傷の痕やばんそうこうなどは見当たらなかった。

ケ「そう……皮肉にもコレはガラスによる切り傷ではなく、窓ガラスをたたいた時にできた打撲だ。しかしお前は言ったよな？「部屋中にガラスが散らばっていた」と。確かに窓ガラスを割って中に侵入したことくらいは想像できるかもしれないが、それでも「部屋中に」という表現は明らかにおかしい……現場である自宅に一度も戻っていないお前が、「息子が首吊り自殺をした」という連絡を受けただけで、なぜ部屋中にガラスが散らばっていることを知っていたんだ？」

紗「そ、それは……」

言葉に詰まる紗百合を、滋は心配そうに見ている。

滋「紗百合…お前、そんな事を言ったのか…？」

ケ「答えは１つだけ、お前が梶北友健を殺そうとした犯人だから…そうだろう？」

その言葉に、紗百合はもはや何も言わなかった。

克「母さん……なあ、なんか言えよ！じゃないとホントに犯人にされちまうぞ！」

それでも紗百合は何も言おうとしない。そんな紗百合を見て、ケンイチはどこか悲しそうな表情を見せる。

ケ「……オレは、生まれた謎を解き明かせればそれでいい。真犯人を検挙できるかできないか、そんなことには興味がないからな。」

陽「え…？」

いきなりの言葉に、陽が思わず言葉を漏らす。

ケ「実際、あの時の言葉も今の証言も、録音もしていなければ警察が聞いているわけでもない。お前たちがグルになれば、真相を隠しておくことも可能だろう…」

美「な…あんた何が言いたいのさ！」

ケ「別に……オレはこれ以上、この事件に言及することはないと言っている。」

滋「それは……警察に告発しない、という事か？」

ケ「ああ。それをするしないはお前たちの自由だ。」

そう言って、ケンイチは紗百合を見た。

ケ「お前が自首をする、という手もあるが…それだってオレが強要することじゃない。」

陽「ケンイチくん……」

ケ「オレはもう何も強要はしない。……ただ、なぜお前が犯行に及んだか…今回の事件の動機だけは聞かせてくれないか。」

そんなケンイチに、晶は驚いたような顔をしている。

晶「珍しいな、お前がそんな人の心理を知りたがるなんて……」

そういう晶の隣で、隆平が何かに気付いたように、そして切なげな顔をする。

隆「もしかして、友健くんと賢一を重ねてんじゃ……」

その言葉を聞いて、梶北家と友健の関係を知らない、陽と隆平を除く部員たちは不思議そうな顔をしている。そんな中、紗百合がうつむいたまま小さく口を開いた。

紗「我慢、できなくなったのよ……」

滋「我慢…？」

そう訊く滋に何も答えず、紗百合は静かにその場に崩れるように座り込んだ。

紗「滋さん、知ってた？あなたの妹、志麻さんの旦那……松前寛治郎はね、かつて私をゴミみたいに捨てた最低な男なのよ？」

滋「寛治郎くんが、お前を捨てただって…？」

紗「ええ、あの男は女を金でしか見れない男なのよ…最初はしつこく言い寄られて付き合い始めたんだけど、付き合ってからはさんざん私に貢がせておいて、私が「もうお金は出せない」とか、「別れたい」とか言ったらすぐに暴力…しまいには金持ちの娘を見つけて私を捨てたの……でも、私はそれでよかったわ。そのおかげであなたにも出会えたし、あなたとの間に２人も子供ができた。もう一生あの男とは縁が切れたとも思ってた。なのにあの男はよりにもよって志麻さんに近づいて……」

一見、今回の事件と関係なさそうな話題に、滋以外の一同は少し不思議がり始めている。

陽「妹さんとその旦那さんって…もしかして友健くんの本当の両親？」

路「本当の両親って、どういうことだよ？」

友健は引き取られた子だと知らない、陽や隆平以外のメディア部のメンバーは陽の言葉に反応している。

海「そう言えば隆平センパイ、さっき、ケンイチさんが友健くんと賢一センパイを重ねてるとかって言ってましたけど……」

隆「ああ…賢一のハンカチを探しにここに来た時だったと思うけど、紗百合さんから聞いたんだよ。友健くんは本当は滋さんの妹夫婦の子供で、両親が事故死したから引き取ったんだって。」

その話を聞いて、美優希も克昭もどこか嫌悪そうな顔をしている。それに気付いてか、隆平はあえて話を続けた。

隆「それで、滋さんってあのＫＡＪＩ工業の社長でさ、友健くんが来るまではそこの兄さんが跡を継ぐ予定だったらしいんだけど、思いやりのないアイツよりも優しい友健くんの方が社長に向いてるって、滋さんは友健くんを跡継ぎにしようと思ったんだとよ。」

克「テメェ！何人ん家のことペラペラしゃべってんだよ！」

思わず隆平の前まで歩いてきて、隆平の胸ぐらをつかみあげる克昭だったが、隆平もひるまずにその手を払う。

隆「事実だろうが！この人でなし！」

克「んだと？！」

孝「やめろ、隆平！」

危惧していたように頭に血ののぼりかけた隆平の肩を引き、孝彦が止めに入る。

孝「克昭さんの言う通りだ、少し言いすぎだぞ。」

隆「…ッチ」

悔しそうに舌打ちをする隆平を見て、克昭も少し落ち着いたようだった。

孝「ったく……ん？」

孝彦はふと、紗百合を見て異変に気付いた。紗百合は先ほどとは違い、まるで怒りをあらわにするようにその両手は細かく震えていた。

克「か、母さん…？」

紗「人をゴミみたいに捨てて置いて…私の大事な人の妹に手を出して……やっと死んでくれたと思ったら、今度は何？何で私があの男の子供の面倒まで見なくちゃならないのよ！なんであの男の子供が、克昭を差し置いて滋さんの跡を継ぐのよ！」

そんな紗百合を見て、修丸が少しおどおどと訊く。

修「あ、あの…その寛治郎さんと紗百合さんの関係を、友健くんは知ってたんですか？」

紗百合は目線を変えず、先ほどよりは落ち着いた口調で答える。

紗「知ってるわ…あの男、生きてる時に酔いの勢いで友健にその話をしてたみたいだから。それこそ友健本人が、あの男と私の関係を聞いたって前に言ってたもの……」

そんな紗百合に、晶は最悪の答えを予想しつつ紗百合に訊く。

晶「もしかして…自分を捨てた男の子供だからってだけで、友健くんを殺そうとしたんですか…？」

そんな晶に、紗百合は先ほどよりは落ち着いた声で言う。

紗「もう限界だったの…確かに友健は気が利く子ではあるけど、それだって憐れみに決まってるもの……あの子を見る度にあの男を思い出す私を、自分が社長の座を奪ったことで立場の無くなった克昭を、何もしなくても将来が約束されてる自分と違って仕事で苦労してる美優希を、あの子はただ憐れんで気を利かせてるように見せてただけなのよ……だから、この家族がもっとダメな方に行かないように…滋さんがあの子に入れ込みすぎないうちにって……！」

陽「憐みなんて…そんな……」

悲しそうな顔でそう言う陽だったが、紗百合は自嘲気味に言う。

紗「憐みじゃないとしたら…演技かしらね？」

滋「演技だって…？」

紗「あなたに気に入られれば、いずれはあなたの跡を継げると思って、気の利くいい子を演じていたのよ、きっと。いいえ、間違いないわ！だって友健はあの男の子供だもの！それくらい平気で出来るに決まってる―」

ケ「逃げてんじゃねーよ！！」

紗百合の言葉をさえぎってケンイチは怒鳴った。その声に、皆驚いている。

陽「ケンイチくん…！」

ケ「お前はそうやって、過去の男に振り回される弱さを他人になすり付けて…自分はただ逃げてるだけじゃねーか！」

紗「な、何よ！あなたに何がわかるのよ！」

紗百合もケンイチに言葉に怒りを込めて怒鳴り出すが、ケンイチは少し間をおいて、また落ち着いた口調で答え始める。

ケ「何がわかる、はこっちのセリフだ…！お前は…どんなに新たな家での居場所が悪くとも、それでも他人を責めずに…誰も責めずに前を向き続けた梶北友健の、何を分かっているんだ……」

その言葉に、紗百合は思わず驚く。

紗「ど、どういうことよ……？」

ケ「本当はオレが渡していいものじゃない。だがな…お前には知る必要がある。」

悲しそうな表情でそう言って、ケンイチは数枚重ねて折りたたんである便箋を胸ポケットから取り出して紗百合に渡した。

紗「これは…？」

ケ「梶北友健の机の奥に入っていた、お前たち家族に宛てた手紙の、お前宛ての手紙だ……さっき、お前が病院に行っている間にここに来た時、見つけてオレが持ちだしたんだ。」

紗「友健が、私たちに…？」

ケ「いいから読め……」

そう言われ、紗百合は手紙を開いた。

「お母さんへ

最近疲れてませんか？……僕にこんなこと言われても嫌かもしれないけど、でも本当に心配です。

……実は、お母さんが疲れている原因は僕じゃないのかなって思って、それでこんな手紙を書いたんだ。最近は特に、お兄ちゃんやお姉ちゃんを怒らせることが増えちゃったから。その度にお母さんを心配させちゃってるから……

お母さんはとても優しい人だから、お兄ちゃんやお姉ちゃんが大変な時に僕を引き取るってことになっても、嫌な顔をしないでくれたよね。お兄ちゃんやお姉ちゃんが僕のこと嫌がっても、お母さんはいつも僕は悪くないって言ってくれたよね？…今の家で辛い時もあるけど、お母さんがいてくれるから、僕、頑張れるんだよ。

だけど、本当は僕がこの家に来たことで、この家にいることでみんなにすごく迷惑かけてるって、わかってるんだ。わかってるんだけど、それでも少しでもみんなが喜んでくれるように頑張っても、それがまた迷惑だってこともわかってて、もう、どうしていいかわからなくなっちゃったんだ。

それでね、中学を卒業したらここを出ようと思うんだ。今まで黙っていたけど、担任の先生に相談したら、小さい企業だけど中卒でも大丈夫で、しかも住み込みで働ける職場があるって紹介してくれて、話がまとまったらそこの社長さんと会ってみる予定なんだ。

本当は早くに親に相談しなきゃいけないことなんだろうけど、なんだか、僕に跡を継がせるって言ってくれたお父さんや、新しい仕事が大変でも頑張ってるお姉ちゃん、本当はお父さんの跡を継ぐはずだったお兄ちゃんの気持ちを踏みにじるような気がして…

だから最初にお母さんに相談したかったけど、僕のことでまたお母さんの負担を増やすのは嫌なので、この手紙はお母さんが今よりも元気になったら渡すことにします。お父さんやお姉ちゃん、お兄ちゃんにも手紙でだけどちゃんと伝えるから大丈夫です。

僕がちゃんと働き始めたら、いずれ社長としてＫＡＪＩ工業を引っ張るお兄ちゃんや、今は１人で頑張ってるお姉ちゃんを支えてあげてください。

この手紙を渡せる日が早く来るといいな。

最後に。

いつもありがとう。僕、お母さんが大好きです。話がうまくまとまったら来年の４月にはここを出るけど、これからも僕のお母さんでいてください。友健」

最後まで目を通し、紗百合は思わず手紙を落としてしまう。その様子を見たケンイチは、極力自分の感情を抑え、しかし芯に怒りのこもる口調で言う。

ケ「お前の愛情は、過去の男を恐れるあまりの偽りだったのかもしれない…だがな、梶北友健は偽ることなく、お前を信じ、家族として愛していたんだ…」

紗「嘘……嘘よ！あの子が克昭や美優希の事を考えてたなんて…私の事、こんなふうに思ってたなんて……」

手紙を読んでいないメディア部や滋たちは何の事かはわかっていなかったが、ケンイチの言葉と紗百合の状態で大体の事は察したようである。誰も何も言おうとはしなかった。

紗「友健…友健……！」

泣き崩れて、友健の名を呼ぶ紗百合の目には、後悔と罪悪の涙が溢れ出ていた。その姿にみな複雑な表情を浮かべたが、その時晶の携帯が鳴った。

晶「あ…先生だ。」

ポケットから携帯を取り出してそう言う晶に、メディア部のメンバーはケンイチを除き、みな興味ありげに晶の周りに集まる。

晶「ハイ…え？！ホントですか？！…ええ、いますよ？あ、はい、わかりました。」

そう言って、晶は紗百合の方を向いて携帯を差し出した。

晶「あの、友健くんが話がしたいって……」

その一言に、梶北の３人も驚いている。

紗「え…？」

克「話って……アイツ、目ぇ覚めたのか？！」

そういう克昭に、晶はうなずく。

滋「紗百合…出てあげなさい……」

滋にそう言われ、紗百合は戸惑いながらも晶から携帯を受け取り、耳元に運ぶ。

紗「もしもし…？」

友「あ、お母さん……？」

紗「友健…？大丈夫なの……？」

友「うん、もう大丈夫。…あの、ごめんね？」

その言葉に、紗百合はひどく驚いた。

紗「な、何言ってるの……！あなた、わかってるんでしょ？あなたにひどいことしたのは誰かって……謝らなきゃいけないのは―」

友「僕だよ…だって、お母さんのこと、また困らせちゃったもん……いっぱい悩ませちゃったもん……」

紗「やめて！」

そう叫ぶ紗百合の頬には涙が流れていた。

紗「あなたは何も悪くないの…全部お母さんが悪いの……！」

友「……ねえお母さん、迎えにきてくれる？あのね、僕、話したいことがあるんだ……」

それっきり何も答えない紗百合だったが、その聴力ゆえに電話の向こうの声が聞こえている隆平は紗百合と目線を合わせて言う。

隆「紗百合さん、行ってあげなよ……アイツの気持ち、今ならわかってあげられるだろ？」

その言葉に、紗百合はただ泣きじゃくりながら何度もうなずいた。そんな紗百合に、隆平はとても優しく微笑んだ。滋も優しく、紗百合を抱きしめてあげていた。

事件のすべてが片付き、梶北の４人は友健のいる病院へ、メディア部のメンバーは帰路についていた。もちろん、陽とケンイチは一緒である。

ケ「なあ……」

いつものように陽と距離を置いて歩いていたケンイチが、ふと立ち止まって言う。

陽「え……？」

ケ「お前には…オレはどう見える？」

陽「どうって……？」

ケ「オレは梶北紗百合に、逃げるなと言った。…だが、逃げてるのはオレなんじゃないのか……」

陽の前で立ち止まったまま振り向きもせずにそう言うケンイチだったが、いつもの冷淡な口調の中に、不安と恐れが見える口調だった。

陽「ケンイチくんが……逃げてる？」

ケ「……賢一の精神を死なせないため、なんてもっともな事を言っておいて、本当はオレが恐れているだけなのかもしれない。賢一が前へ進もうとすることを……賢一と向き合う事を……」

その言葉の意味こそわからずとも、陽は思わずケンイチの手を優しく握った。ケンイチは何も言わず、しかし嫌がることもなかった。

陽「逃げてなんかいないわ……」

ケ「なぜ、そう言える……」

陽「あなたは、ヨシくんとちゃんと向き合ってるじゃない……」

ケ「オレが賢一と向き合っている……？フン、寝言は寝て言え。オレは賢一の気持ちを無視して、オレの独断でアイツを真実から遮断して……アイツを今に留まらせているんだぞ……？」

ケンイチの声はひどく不安がこもっている。そして何を想っているのか、陽と繋がっていない片手は拳を握り、小刻みに震えている。

陽「それは……あなたがヨシくんを前に進ませないのは、ヨシくんを守るためだから……誰かを守ろうとすることは、逃げる姿勢じゃ絶対に出来ないじゃない。」

ケ「……」

少しの沈黙の後、ケンイチは陽の手を振り払って歩き出す。

陽「あ、待って…」

その声に、ケンイチはまた立ち止まった。

ケ「前に……お前は賢一の記憶を戻したいと言っていたな。」

陽「え、ええ……」

ケ「記憶が戻れば、賢一の精神は死ぬ……そんなことを聞いた後でも、そう思えるのか？」

その問いに、陽は少し不安そうにうつむいたがすぐに何かを決意するようにケンイチの背中を見る。

陽「ヨシくんは、過去に負けたりなんかしない……」

ケ「……」

何も言わないケンイチに、陽は続ける。

陽「たとえどんなに辛い過去だとしても…ヨシくんはそれを受け止めて、そして前に進めるって信じてる……！」

ケ「何も知らないくせに、よくそんなことが言えるもんだな……」

そう言って、ケンイチは小さく鼻で笑う。

ケ「……そうか、得体のしれない存在のオレが言うことなど、本気にしていないだけか。」

陽「違うわ…」

その言葉に、ケンイチは背を向けたままにして、ひどく驚いた。

陽「あなたのことも、私信じてるんだから……」

ケ「オレを、信じてるだと……？」

陽の言葉に、ケンイチは思わず振り向いて陽の顔を見る。陽はそんなケンイチに、優しくうなずいて見せる。

陽「私ね、ヨシくんが記憶がないことに苦しんでるって話してくれるまで、ヨシくんの記憶を取り戻させてあげようって考えがなかった。…ううん、考えたくなかったの。だって、もし記憶が戻ったら、今までみたいに姉弟として過ごしていけるかわからなくて、それが怖かったから……でも今は、ヨシくんが記憶を取り戻す時は、絶対にヨシくんを支えてあげるんだ！って思えるわ。……ヨシくんを守ろうと頑張っているあなたがいてくれるから、そう思えるのよ。」

ケ「バカを言うな……！オレは……オレは賢一を不幸にした張本人なんだ！なのに、こんなオレの何を信じると言うんだ……」

珍しく迷うような口調のケンイチ。だが、陽は対照的に迷いのない声で言う。

陽「あなたがヨシくんを不幸にしたっていうことの意味は私にはわからない……それでも、あなたは今、たった１人で不安と戦って……必死にヨシくんを守ろうとしてくれているじゃない。」

ケ「……」

何も言わないケンイチに、陽はとても優しく続ける。

陽「あなたが何者かなんて関係ない……私の大事な弟を…ヨシくんを必死に守ってくれるあなたを、私は信じてる。」

その言葉にケンイチは少しの間黙っていた。その沈黙に、陽は気まずそうにうつむき始める。

陽「あの、ごめんなさい……こんな、口だけで信じるだなんて無責任よね……でも私―」

陽の言葉を遮るように、ケンイチは静かに口を開いた。

ケ「なら……オレもお前を信じてやるよ……」

陽「え……？」

ケンイチの顔には堅い決意が見えていた。そして、まるで自嘲するようにうつむく。

ケ「いつからか、なんとなくだが感じていたんだ……たとえお前が賢一の記憶に干渉しようとしなくとも、オレがいくら賢一を真実から遠ざけようとしても、何か……理屈では説明できない何かが賢一の記憶に干渉しようとしている事を。いずれどんな形にせよ、賢一が記憶を取り戻す時が来てしまう事を……」

そう言って、ケンイチは賢一が部屋で叫んだ時に聞いた声を思い出す。

　―？「お前のせいだ……お前が殺したんだ！！」―

―？「お前がいるせいで、みんな不幸になるんだ！！」―

そして辛そう表情を浮かべ、ケンイチは陽の顔を見る。

ケ「気付いてもいたんだ。その時を少しでも遅らせようとするだけじゃ何の解決にもならないと…オレはただ向き合うべき相手から目をそむけているだけだと、な。」

陽「ケンイチくん……」

陽は、ただケンイチを心配そうに見守っていた。そんな陽に、ケンイチはどこか少しだけ安心の色を見せて、また目を合わせる。

ケ「オレはまだ……賢一の過去と関わってはいけない気がする。だが、お前が賢一の記憶に干渉しようとすることを止めはしない。お前のその行動が、賢一のためのものだと信じてやる……」

その言葉に、陽は思わず嬉しそうに微笑んだ。

陽「……ありがとう。」

ケ「…！」

その顔を見て、ケンイチは一瞬驚きの表情を見せたようだった。しかし陽がそのことに気付かないうちにまた前を向き、静かに歩き出した。陽もそんなケンイチに何も言わず、ただ後をついて行くように歩き出した。

翌日のメディア部、部員たちは活動もそっちのけに鳩谷の話を熱心に聞いている。

鳩「病院の先生がな、目が覚めたなら峠は越したも同然だから、もう安心だと言ってたよ。」

隆「マジですか！…よかったぁ。」

心底ほっとしてそう言う隆平を褒めるように鳩谷は続ける。

鳩「それと、友健くんの家族が来るまでにお前たちが友健くんを助けたって話をしたらな、お礼を言っといてくれって言ってたぞ。」

そんな鳩谷に隆平は嬉しそうに笑い、向かい側に座っている孝彦もどこか嬉しそうである。

孝「しかしまあ、世の中何がどう役に立つかなんてわからないもんだよな。」

陽「どういうこと？」

孝「今まで隆平が嫌がってきた地獄耳が、友健くんの発見を早めたから手遅れにならずに済んだようなもんだろ？」

その言葉に、隆平は少し驚いたような顔をする。

隆「孝彦…お前、俺が地獄耳嫌がってたの知ってたのか？」

その言葉に、孝彦は一転して呆れた顔をする。

孝「……んなもん、毎日部活で顔合わせてりゃ誰だってわかるだろ？」

そう言う孝彦を、部員たちは不思議そうな顔をしている。

孝「な、なんだよみんなして……」

路「あ、いや……俺はてっきり、地獄耳は隆平の自慢なのかと思ってたからさ……」

海「僕もですぅ。」

晶「同じく。…お前は？」

晶に話を振られ、修丸もうなずいてから孝彦と隆平を見る。

修「やっぱり、孝彦くんって隆平くんのことをよく見てますよねぇ。」

その言葉に、隆平が本気で嫌そうな顔をする。

隆「孝彦が俺を見てるぅ？！…うっわ、気持ち悪りーなオイ！」

孝「……修丸、お前の目ってンッッッットに節穴だな（怒）」

２人の猛講義（？）に、修丸はいつものようにオドオドし始める。

修「え…！あの、僕、何かマズいこと言いました……？！」

それから、隆平は気を取り直すように言う。

隆「ま、なんかケンイチも俺の頭痛のおかげでトリックに気付いた、みたいなこと言ってたし、確かに地獄耳も捨てたもんじゃなかったな。」

そんな中、賢一が鳩谷に心配そうな顔をして訊く。

賢「先生、あの……」

鳩「ん？」

賢「紗百合さんは……あの後どうしたんですか？」

その質問に部室に緊張が走る。

路「そういや、賢一はケンイチが出てる時のことも覚えてるんだもんな……」

賢「ええ……ケンイチ、昨日は家に帰ってから紗百合さんの事ずっと考えてたみたいで……」

修「え…わかるんですか？」

賢「いえ、わかるって言うか、そんな気がしただけなんですけど……気が付いたらケンイチ、いなくなってましたし……」

その話を不思議そうに訊く部員たちに、陽が付け足すように説明する。

陽「朝起きたら、ヨシくんに戻ってたの。……ケンイチくんが寝ている時の記憶は、ヨシくんにもないんだって……」

晶「ふ～ん、なんか複雑だな（汗）」

そんな晶を見てから、賢一は再び鳩谷の方を見た。

賢「それで、紗百合さんは……」

鳩谷も、不安そうな賢一に少し辛そうに答える。

鳩「自首、したよ……紗百合さんが警察に行った後に旦那さんから聞いた話だが、友健くんは自首しないでほしいと言ったそうだ。紗百合さんは何も悪くない、悪いのは紗百合さんを追い詰めてしまった自分だからと。でも、紗百合さんも「もう逃げたくないから」と、そう言って自首を決めたらしい。」

賢「そうですか…」

そう言った賢一は、どこか寂しそうだった。だが、そんな賢一に気付かず、隆平はいつものノー天気な調子で言う。

隆「なぁ～にしょげてんだよ、賢一！」

そう言って賢一の背中を思いっきり叩く隆平に少し驚きながら、賢一は浮かない顔のまま答える。

賢「いや……強いなぁって、思って……」

その言葉に、陽は何か心当たりがあるように少し切なげな顔になる。

鳩「強いって、友健くんがか？」

賢「友健くんも…紗百合さんもです。友健くんみたいに、誰も責めずに前向きに生きるなんて簡単にはできないことですし、紗百合さんのように、最終的には逃げない道を選ぶことだって……それに、ケンイチだって……」

そう言ってうつむく賢一を見て、陽も同じく浮かない顔になってしまう。そんな２人に、晶は少し呆れたように言う。

晶「まあ、そりゃあケンイチは強いだろうよ……よくもまあ、あんなにズバズバと言いたいことが言えるもんだ。」

路「ホント、あの自信は羨ましいですよね。……ま、あの頭の良さあっての自信なんでしょうけど。」

そんな話をしている２人に、賢一は困ったように言う。

賢「あ、いや……ケンイチは―」

そう言いかけた賢一の肩に陽が手をかけ、振り向く賢一に優しくも寂しげな顔で首を横に振った。

賢「え…？」

少し間があったものの、賢一も陽の言いたいことを理解したように苦笑し、そして前を向く。

路「どうした？ケンイチは…なんだよ？」

賢「いえ、なんでもありません！…ね？」

そう言って陽と目を合わせる賢一に、陽もうなずく。

晶「なんだよ、気になるな！」

陽「気にすることじゃないですよ。友健くんも紗百合さんも、それからケンイチくんも強い。それでいいじゃないですか。」

そう言って、陽と賢一は笑いあう。

隆「いくねーよ！そのぼかし方、余計気になるだろうが！」

そう言って、隆平は賢一の後ろまで歩いてきたかと思えば、ヌルリと賢一の首に腕を回す。

隆「なあ～、教えろよ賢一くぅ～ん！」

賢「いや、ちょっとやめてくださいよぉ！」

隆「大体なぁ！前から言おうと思ってんだ！お前らの今みたいな目配せ、恋人同士みたいで無性に腹が立つんだよ！姉弟のくせに！」

海「あー、隆平センパイったら今全国のきょうだい敵にしましたね！」

孝「気にするな龍海、１６、７年も生きてきて未だに彼女がいないからって、後輩に八つ当たりしてるだけだからさ。」

海「そっかぁ、隆平センパイ心狭～い！」

隆「うるせえな！ブラコンは黙っとれ！」

海「わー！センパイが怒ったぁ！兄ちゃ～ん！！」

そう言って龍路の後ろに隠れる龍海。

路「おー、おー、りゅーへーセンパイ怖い怖い。きょうだいの敵だぁ。」

龍海の頭をなでながらもはや棒読みの龍路。そんな２人を見てさらに怒る隆平は、やっと賢一の首に巻いた腕を離す。

隆「龍路まで何ふざけてんだよ！」

そこまで言って、思い出したかのように孝彦の方を見る。

隆「ってか孝彦！お前もさらっと俺の彼女いない歴暴露してんじゃねーよ！」

孝「ホントの事だろうが……ってか、お前いつもだけどうるさいぞ？」

そう言いつつ、自分の机の中から本を取り出す孝彦。

隆「テンメェ～！……よし、決めた！今日という今日こそは白黒はっきりさせてやる！」

修「白黒って……何のですか？」

孝「そんなこと、知るか……」

そう言いつつ本を読み始めている孝彦。そんなカオス（？）な部員たちを見てもはや呆れるしかない晶と鳩谷。

鳩「おいおい、思いっきり話が脱線してるぞー……」

晶「結局、自分ら何を気にしてたんでしたっけね？」

その言葉を聞いて、陽は苦笑気味にも、嬉しそうに小さく微笑んでいた。

陽（Ｍ）「いつも自信に満ちた態度しか人に見せないケンイチくんだけど、本当は、ヨシくんを守ろうと必死に戦っていて、その不安と隣り合わせだってこと……今は私とヨシくんの胸の中だけに秘めておきたかった。……そのことを私に話してくれたことが、私を信じると言ってくれたことが、なんだか少しだけケンイチくんに近づけたような気がして、すごく嬉しかったから。弱気になったケンイチくんのことをみんなに伝えることが、彼を裏切るような気がしたから……だけど、ケンイチくんが何者でもいいと思っていたのに、もっと彼を知りたいと思ったのは……どうしてだろう……」

陽はそんな想いと共に人知れず、そして無自覚にも不思議そうな顔をして、どこかホッとした表情でドタバタを見ている賢一を見つめていた。